
空白の歴史

あすた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空白の歴史

【Nコード】

N8036X

【作者名】

あすた

【あらすじ】

人質として異国の都で暮らす亡国の王子の物語。庇護者であった王が身罷り、新王が登極したことで、王子の運命が大きく動き出す。果たして、王子の行く末と婚約者とした姫との恋の行方、そして、祖国の命運は……。魔法もなければ、天使も悪魔もでてきません。純粋な人の営み、歴史を恐れもなく書いてみようと思っています。

星明かり（前書き）

歴史とは悲劇だと前提にした作品です。

星明かり

ここに年表があるとして、それはただ事実のみを淡々と語ることしかしない。事実の裏に潜む彼らの心情も、葛藤も、そして、躊躇いも、決して語ることはない。その語られることのない「空白の歴史」を、ほんの少しだけ語っていかうと思う。時は西海曆三五六五年五月一二日、所はマルニアーム王国王都ディエンテの夜、この物語の主人公であるカリファスの一六歳の誕生日から始まる。

その日、カリファスは自らの誕生日を祝う宴の席を無断で抜け出すと、もれ出てくる部屋の明かりに背を向けて、張り出された露台から数多の星がきらめく夜空を見上げた。露台の隅で風に炎を揺らす蠟燭のほのかな明かりに浮かび上がるその姿は、優艶と呼んでも決して過言ではあるまい。澄んだ青い瞳に宿るのは深い憂愁であったが、美を愛でる神々の寵愛を一身に受けたであろう美貌は、男であることが惜しまれるほどであった。長身で華奢な体軀は触れれば折れてしまうのではないか、と思えるほどである。その彼の周囲を風が吹き抜けて、闇の一部を切り取ったかのような長い髪を愛撫していく。背中を覆うほど伸びた髪は、七年前のあの日から一度として切ることなく伸ばし続けたものだ。彼の秘めた想いを、もしかしたら、この髪だけが知っているのかもしれない。

彼が見上げる視線の先で、星は無数に瞬ききらめいて幻想の世界を作り上げていた。見上げた視線を地上に転ずれば、常夜灯の篝火が何か生あるもののように燃え盛っては飛び込んでくる羽虫を呑み込んでいく。その炎はカリファスに過ぎた日のことを思い出させるに充分だった。今では滅びたストイナ王国の王の子として生まれた彼は、国が滅亡した後も不穏な動向を示すストイナの民を牽制するため、人質として異国の都での生活を強いられていた。

国が滅びたあの日のことは、カリファスの脳裏に今もなお鮮明に刻まれている。

「わたしは、母上と運命を共にする覚悟を決めました」

虜囚の身となつて勝者の慰み者になるよりか、ストイナ王家の女として気高くその生を終える。「死」というものに至高の価値を見出した母と姉を、わずか九歳でしかなかった少年に理解することはできなかつただろう。続いた姉の言葉も、この時の彼には何のことかわからなかつたはずである。

「ですが、あなたは生きなければなりません。生きて、生き抜いて、そして、血を残しなさい。そうすることで、その血の続く限りストイナ王家もまた、永遠に続いていくことができるのですから」

四つ年上の姉は、弟の肩に手を置いてそう言った。姉の果敢無い微笑に対して、弟はうなずくよりほかに応える術を知らなかつた。その姉の去り行く後ろ姿を忘れることはないだろう、笑顔のよく似合つた優しくも美しかつた姉の最期の姿を。

それは、わずか七年前のできごとにすぎない。あれから月日は流れ、少年は青年へと変貌を遂げようとしている。留まることを許さない時間の流れは、そのままカリファスがマルニーム王国の王都ディエンテで暮らした時間でもあつた。

その王都ディエンテは、陸上貿易の中継地として発展してきた街でもある。四方を天然の要害に囲まれた狭隘な盆地にあつて、山肌を削つて階段状の街並みを築いている。そこに住まう者は、盆地のほぼ中央に位置する王宮を見下ろすことになるのだが、それを不敬だと言つて咎めた王は、幸いにも長い歴史の中で唯のひとりとして存在しない。

それでも、王宮内にある「太陽の塔」より高い建築物は禁止されている。この「太陽の塔」にはもうひとつ「虜囚の塔」という別名があつて、あの塔は天道を指して太陽の道標となつている、とある王の治世にある貴族が言つた。それが由来となつて「太陽の塔」と呼ばれるようになった。また、別の王の御代において、あの塔に部

屋を戴くのが自分の願いだ、と願い出た貴族があった。その貴族の存在と世辞を嫌った王は、その願いを叶えてやろう、と言ってその貴族を生涯塔の一室から出さなかった。その故事から「虜囚の塔」という名が付いた。

しかし、どのような名で呼ばれようとも、夕暮れ時、その塔の頂上から見渡す景色は絶景と呼ぶにふさわしい。はるか遠くの稜線は太陽の余光を受けて影絵のように浮かび上がり、階段状の街並みは朱に染まって空気さえも色付いて見えるほどである。

その塔の屋根の尖端が、露台に立って再び星を見上げるカリファスの視界の片隅に映る。天に向かって真つすぐ伸びるそれは、空を切り裂く槍の穂先のように見えて、カリファスはあまり好きになれなかった。

「カリファスどの、今宵の主演であるあなたが、このような所で何をしているのだ？」

背後からする声にカリファスは、決して誰にも真似できないであろう優雅さで振り返ると声の主を確認した。

マルニアーム王国国王エドワルには三人の子があつて、カリファスに声をかけたのは、その二番目に当たるアリマールだった。愛嬌さえ感じられる容貌に、茶色の瞳に穏やかな微笑を宿したアリマールがゆつくりとした歩調でカリファスに近付いてくる。艶やかな衣装を身にまとったアリマールに対して、カリファスは裾に誰かの手による刺繍のなされた白の上下を身に付けている。その差が、勝者と敗者を分かつ境界線であるのかもしれない。

「主演が欠けては、何のための祝宴かわからなくなるではないか」「申し訳ありません、アリマール殿下」

努めて微笑を作ろうとカリファスは思うのだが、その瞳まで笑つてはいない。それでも、発せられた声音は一流の奏者が奏する琴の音のようで、聞く者の耳に心地よく流れていく。

「星があまりに美しくあつたため、つい見入っておりまして」

そういつたカリファスに並んだアリマールは、露台の手すりに背中をあずけると天空を見上げて、なるほど、とつぶやいた。そして、右手を高く伸ばすと、何かをつかみ取るような仕種を試みせる。

「どうやら、わたしの手は星をつかめるほど長くはないようだ」

陽気な口調でそういつて、アリマールはカリファスに微笑を向けた。風に揺れる鮮やかな金髪は、この夜の天空にはない月でも映したかのようにだつた。肩にかかる程度に伸ばしたその黄金の髪に、真珠の髪飾りが嫌味なく添えられていた。カリファスと同じくらしいの長身ではあつたが、カリファスほど華奢ではなく、並んで立つ姿にも何らの遜色はない。

「殿下は、星をつかみたい、と望まれるのですか？」

星空を見上げて、カリファスが問いかける。その問いに、アリマールもまた夜空を見上げて答える。

「いや、わたしは手に入らぬ物をほしいとは思わぬ。もつとも、兄上は星の軌道さえもご自身の物にしたいらしいが……」

アリマールの兄、サリハールの憎悪と嫌悪の宿った薄い茶の瞳が、カリファスの脳裏を一瞬だけよぎつていった。

「……星が美しく見えるのは、決して手には入らぬ物だ、と知っているからだ」

その通りであるものかもしれない、アリマールの言葉にカリファスはうなずいた。手に入れてしまった瞬間、急に色あせてみえることもあるが、手に入れても色あせることのない「もの」を、カリファスは護りたい、と願っていた。

静かに瞬く星の群れを、両者はしばらく無言で見上げていた。こうしていることが、カリファスには不思議でならない。アリマールはマルニアーム王国の王エドワルを父とする、カリファスにとって祖国と両親、そして、姉の仇の子であるのだ。人質という立場の力

リファスとは、本来は相容れない仲であるはずが、同じ場所に立ち、同じ空気を吸い、同じように星空を見上げている。これだけでも充分であるというのに、カリファスにはもうひとつ信じられないことがあった。

「アリマール兄さままで一緒になって、何をなさっていらっしやいますの？」

アリマールを「兄」と呼んだ少女期特有の甲高い声音は、エドワールの末娘であるラリアンヌのものであった。カリファスにとって彼女は「奇蹟」に近い存在でもある。淡い桃色の衣裳を身にまとった彼女が、屋内と露台を結ぶ戸口から恥じらうようにしてこちらを見つめている。

今年一三歳を迎えるラリアンヌの幼さを充分に残した容貌は、露を含んで朝陽に微笑む薔薇の蕾つぼみのようであり、後数年もすれば大輪の薔薇のような美しい女性になるだろう、と誰もが期待していた。青い瞳はよく晴れた空のようであり、長く伸ばした黄金の髪は水面みなもに映る太陽の輝きにも似ていた。長い髪が風に揺れると、そこに黄金の波紋が夜の闇の中に見えるようだった。

「カリファスさまを呼びにいかれたまま、お兄さままでお戻りにならないものだから、何事かあったのではないか、とお父さまとお母さまも心配しておりますわ」

その言葉が示すように、この夜、カリファスの誕生日を祝ってくれるは、この兄妹とその両親である。カリファスに対して明らかにそれとわかる敵意と憎悪を向ける、アリマールとラリアンヌの兄サリハールは、父王の言い付けに背いて欠席している。

そして、兄弟妹の両親とは、マルニアーム王国の国王エドワールとその后シスタリアのことで、滅びた国の王の子の成人を、滅ぼした国の王が祝っていることになる。この一事だけでも明白のように、カリファスはエドワールから賓客として優遇されている。ラリアンヌを許婚者としたのも、その一環であるのだとしても、裏には別の事情があつて、ストイナの滅びた国の民が激発することのない

ように、とする政治的な配慮でもあった。

しかし、周囲の思惑はともかくとして、婚約した両者はまんざらでもないようである。

「星を見ていたのだ、ララ」

兄は妹を、ララ、と呼んで手招きした。妹は兄の誘いには乗らずに庇かばの下から空を見上げるにとどめた。だが、どうやら妹は兄ほどの感慨を受けるにはいたらなかったようである。

「星は逃げたりなどしませんわ。明日の夜も、きつと今夜と同じように姿を見せてくれますわ」

そこで一度言葉を切ったラリアン又は、カリファスに対して思慕の眼差しを向けると続けた。

「ですけど、カリファスさまの一六歳の誕生日は、今日だけしかありませんわ」

「もつともだ。カリファスどの、これ以上国王陛下と王后陛下を、お待たせしては非礼にあたるだろう」

そういって、アリマールはおどけて見せたが、カリファスは眉ひとつ動かさなかった。その様子に、アリマールは内心で溜息をもらす。自分には想像さえ付かない悲哀が、カリファスという一人の人格を形成したに違いない。最初は同情から仲良くなるうと思っただが、少しずつ付き合いを深める内に三つ年上の実兄サリハールよりも、ひとつだけ年上のカリファスにより強い親近感を覚えるようになって現在にいたっている。

それに対して、ラリアン又は少しだけ事情が異なる。彼女にとって、五つも年上の兄サリハールは刺々しく感じられて恐ろしくさえあった。そうになると、自然とすぐ上の兄アリマールを慕い、兄に誘われるままにカリファスとも友好を深めた。もともと異国の少年でもあったカリファスには純粹な興味があったため、ラリアン又はすぐに好意を示した。その好意が尊敬に変わり、思慕へと移るのに要した時間はそれほど長くはない。

だから、カリファスとの婚約が決まった時、ラリアン又は何よ

りもうれしかった。これで、誰に遠慮することなくカリファスと語らうことができるのだ。あまり多くを語ることはないが、ララリアンヌの言葉にうなずき微笑んでくれる、それだけで彼女は幸福でいられた。カリファスの瞳の奥に宿る悲哀が、いつか微笑に変わる日がくれば、二人で幸福な時間を築いて行けるに違いない、とララリアンヌは信じている。

「さあ、カリファスさま、お部屋に戻りましょう」

そのララリアンヌの言葉に賛同したアリマールが、カリファスの背中を押す。なされるままに歩を進めながらカリファスは、今この瞬間を幸福に思う自分を意識した。畏怖と恐怖、不安と緊張、それらを一緒に馬車に乗せて国境を越え、異国の都の城門をくぐった。一緒に持ち込んだはずの感情は、いつの間にか霧散してしまっていた。ララリアンヌの無邪気な微笑みと、アリマールの陽気な笑い声が、カリファスを自由にしてくれた。ここに来なければ、得ることのなかった幸福である。

しかし、それは本来得るべきはずであった幸福の代償でしかないことを、カリファスは同時に知っていた。わずかな罪悪感を覚えなくもないが、それでも、不幸でいるよりも幸福でありたい、と望むことは罪ではないはずである。

カリファスの前には、温かく幸福な空間が待っていてくれた。少なくとも、この時までには。

胎動

あるいは、幸福な時間というものは、長くは続かないものであるのかもしれない。形あるものがいつかはその形を滅ぼすように、生ある物がいつかはその生を終えるように、幸福な時間は刹那の瞬きにも似ているように思える。そして、幸福な時間が優しく甘美なものであればあるほど、終焉は残酷であろうとするのだろうか。

果たして、その終焉の訪れが告げられたのはいつであったか。夢の残滓にまどろんでいた時は、まだ幸福の延長線上にいたはずだ。だが、山も登れば下るしかないように、太陽も中天をすぎれば西の彼方の稜線に没していくしかないように、カリファスの偽りの幸福も、また確実に消え去ろうとしていた。

西海暦三五六年六月一九日、その日の日没を待たずして、マルニアーム王国の国王エドワルが崩御した。一ヶ月ほど前から体調を崩して寝込みがちではあったが、まだ四〇を半ばすぎたばかりの早すぎる死であった。誰もがその死に対して、悼み悲しみ、そして、涙を流した。それは、カリファスとて同様だった。祖国と両親と姉の仇を討つ機会を永遠に失くしたのだ、と知りつつも、それ以上の何かが深い悲しみとなって押し寄せてくるのだった。

「勝手に死なれてしまって、これからどうすればよろしいのでしょうか」

露台に通じる大きな窓に背中を向けた男は、憤慨してそう言った。それに対して、カリファスは部屋の中央にある長椅子の肘掛けに身体をあずけたままの姿勢で曖昧にうなずいただけで、発言者の顔を見ようともしなかった。

「われらの憎しみは、どこに向ければよろしいのでしょうか」

ストイナ王国で將軍の家に生まれ、近侍としてカリファスと共に

成長したハドウェルが、苛立ちを吐き出すように声を荒げた。先のストイナ戦役において、ハドウェルもまた両親と兄を亡くしている。異国の都へ移送されるカリファスに、ただひとり同行することが許されて、主同様にマルニアーム王国の王宮に暮らしている。茶の混じった赤い髪は短くそろえられ、黒曜石のような黒い瞳には絶えず激情が宿っていた。その瞳と彫の深い容貌が見せる精悍な表情は、カリファスと同年とは思えぬ妙に大人びた印象をあたえた。背丈はそれほど高い方ではないが、肉付きのよい体格は頼りがいがあるように思える。

それ以前がそうであったように、マルニアーム王国王都ディエンテに移り住んだ後も、ハドウェルはカリファスのために懸命になつてくれた。時には励まし、時には慰め、常に傍らに寄り添ってくれた。だからといって、ハドウェルがカリファスのすべてを知っているわけではない。

カリファスが仇の子であるアリマールと親交を深めるのも、ラリアンヌを婚約者としたのも、そうやってすべてを許容し甘受するのは生き抜くための虚構である、とハドウェルは信じている。そんな彼に向けて本心を明かすことは、カリファスにはできなかった。

王宮の内にも外にも飾らない本心を語ることのできる相手を、カリファスは持ち合わせなかった。少なくとも、カリファスを困む者たちが、彼に対して心を閉ざしているからではないだろう。カリファス自身が心を閉ざしているからだとして、誰に向けて心を開けばいいのだろうか。自身の発する言葉が周囲にあたえる影響を思えば、簡単に本音を吐露するわけにはいかない。人にはそれぞれに似合った、立場があるのだ。

そして、何の前触れもなく、乱暴に自身の手で扉を開けて現れた男の、カリファスに対する立場はというと、一方的な悪意を寄せてくる敵対者であっただろうか。その男の名を、サリハールといった。

いくら優遇されている、とはいっても、その部屋はそれほど広くはない。窓は南側にあつて、そこからは「太陽の塔」もしくは「虜囚の塔」を見ることができが、殺風景な部屋には絵の一枚もなく、三面を囲う壁は白いままであつた。壁からしてそうであるから、床に敷物の類はない。

また、天井から吊るした照明には、本来の半分の蠟燭しか明かりが点いていないためか、部屋全体が薄暗く感じられる。窓と対面をなす壁面にある暖炉の上には、この部屋の雰囲気とは似つかわしくない燭台があつたが、一度も使用した形跡を持たないそれは、必要から置かれているわけではないようである。

その暖炉の隣には天井まで届く大きな書棚があつて、整然と並べられた書籍はアリマールが読まなくなつた物ばかりだつた。だが、その中にストイナ王国の神話に歴史、あるいは、民話といった類の書籍が混じっている。それを知っているのは、カリファスとハドウエル、そして、贈り主であるアリマールの三者だけである。外出することの許されないカリファスを不憫に思ったアリマールが、秘かに市井で買い求めた物で、装丁を変えろという細工まで施してあつた。アリマールは、それらを他の書籍に紛れさせて持ち込むと無言で置いていったのだつた。

そうした中に、カリファスの所有が一冊だけあつた。ストイナ王家の王統譜がそれである。炎上する城で、父から形見として受け取つたそれは、カリファスが何者であるのかを証明する唯一の物であるに違いないだろう。

カリファスの以後、誰の名も記されることはないのだろうが、ストイナ王国が確かに存在したことの証左である。衣服の下に隠して文字通り肌身離すことなく持ち込んだ。書棚の一番高い場所、違つ本を前に並べたその奥に隠してある。

サリハールはその書棚の前に立つて、疑わしげな一瞥を書籍に投げた。天井で揺れる蠟燭の淡い明かりが、彼の金髪を赤く染める。長身でありながら猫背の姿勢が彼を気弱に見せたが、薄い茶の瞳に

宿る明瞭な憎悪と嫌悪が、彼の性格が外見からくる印象とは異なることを物語っていた。兄弟であっても、アリマールとは似て非なるものが感じられる。

それまで身体を休めていた長椅子から慌てて立ち上がって、カリファスはサリハールを迎えた。すでに太陽は天空にはなく、東の空では星が瞬いて夜の訪れを告げていた。むせび泣く声も絶えて、王の死を儀式化するための慌ただしさが、本来あるべき夜のしじまを騒がせている。そうした喧騒に背を向けていたカリファスの静寂は、突然現れたサリハールによって無残にも切り裂かれようとしていた。

部屋の中央、卓台に添えられた長椅子の肘掛けに置いた手に力を込めて、カリファスは佇立したままサリハールの行動を視線だけで追った。書棚に隠した秘密だけは、決して知られてはならない。

書棚に向いていた視線が、カリファスを捉えるとサリハールは悠然とした口調から悪意を紡ぎ出した。決して隠そうとはしない、むき出しの悪意がカリファスを容赦なく襲う。

「まずは、申し開きを聞こうか、カリファス」

そう言われたところで、カリファスは何に対して申し開きをする必要があるのかわからない。エドワルの死去に対する悔みの挨拶をまだすませてはいないが、それを咎めるためだけにサリハールがわざわざ自身で出向いてはこないだろう。カリファスが返答に窮している、サリハールが言葉を続けた。

「わが父たる国王を殺めた理由……」

愉悦を含んで、サリハールの口の端がわずかに歪む。意図を察したカリファスは慄然とした。寸分の時間も無駄にすることなく、父親の死までも利用してカリファスを陥れようというのだ。サリハールの悪意の大きさに、カリファスは改めて戦慄さえも覚えた。

「……いや、愚問であったな。おまえにしてみれば、祖国の仇を討つただけのことであるのだろうか」

紡がれた悪意は、見えざる白刃となつてカリファスを貫いた。動揺を気取られまいと、握りしめた肘掛けに一層の力を込める。そうしなければ、立っていることさえ危ぶまれた。沈黙を唯一の盾として、カリファスはサリハールと対峙する。主に代わつて反論しようとするハドウエルを、片手を上げて制止したのは意識してのことではない。

「不思議とは思わぬか？ あれほどお元気であられた父上が、おまえの誕生日を境に体調を崩されたのだ」

カリファスがまとつた何者をも寄せ付けないであろう静謐さは、常人であれば気圧されて言葉を失つたことだろう。だが、サリハールは常人ではなかった。

「毒でも盛つたか、カリファス？ 今まで育ててもらつた恩を忘れて、おまえが父上を殺めたのだ。忘恩の徒、とはおまえのことを言うのだろくな」

挑発しているのは明確だった。だからといって、カリファスにサリハールの期待にこたえてやらなければならない義務はない。一度目を閉じて何事かを思案したカリファスだったが、再び見開いた瞳に決然とした意志を宿してサリハールを真っすぐに見据えた。

「まこと、殿下のおおせになられる通りであればよいのですが……」
つぶやいて、続ける。

「……わたしがエドワル陛下より賜つたのは、祖国の滅亡にございましょうか。その結果として、母と姉は自裁して果て、父は孤独のうち^{うち}に黄泉へと旅立ちましてございます。これが、殿下のおおせになられる、恩にございましょうか」

「だから、殺めたか？」

「いいえ、わたしは祖国の恨みを晴らす機会を、自ら放棄いたしました。誤解のないよう申し上げます、わたしはエドワル陛下を弑することに、畏れを覚えたのでございます。そうすることで、一度得た治に再びの乱を呼び込むことは、わたしの本分とするところではございません」

世が安定し、平和であれば決して出会うことのなかつた者同士が、為政者の掲げる大義のために傷付き殺し合う、そんな戦を見てきた。「……わたしは、あのような光景を、二度と見たいとは望みません。何があるうとも、決して」

そういつて、言葉を結んだカリファスは、次の瞬間、サリハールの表情が醜く歪むのを見た。瞳に宿っていた憎悪があふれ出て、顔全体に広がったかのようにでさえあった。もともと、美男でもなければ醜男というわけでもなく、平凡な容貌であつたが、今ではそれさえも見る影のない醜悪なものに変わっていた。

「おまえのその言葉を詭弁と言うのだ！ それでアリマールはだませても、このわたしはそうはいかない。おまえの本性、必ず暴いてやるから、覚悟しておくのだな」

思い込みというものは、強ければ強いほど本来の形を歪めてしまう。だが、それでも信じてしまえば、ひとつの真実であることも確かであるだろう。サリハールの信じる真実が、まさにそうであるのだとして、彼は偽りを信じたわけではない。サリハールは自らが生み出した真実を信じたにすぎない。あるいは、信じたかつたのかもわからないが。

「よいか、次代の王はこのわたしだ。それを忘れるな、カリファス」
生殺与奪の全権を握っているのは自分なのだ、サリハールはそう言いたいのだろう。そして、これがカリファスに対する宣戦布告でもあるのだろう。訪れた夜の闇の中に、サリハールの狂気に憑かれた笑い声だけが響く。自らが唯一の勝者でもあるかのように、高く声を上げて笑う様は、ずっと以前からこの瞬間の訪れを待ってでもいたのではないか、とカリファスには思えた。

エドワルという絶対的な庇護者を永遠に失つたことで、カリファスの運命は大きく動き出そうとしていた。傍観することの許されない潮流に、流されるしかないのか、抗うことができるのか、この時

のカリファスには自らの行く末を知る術はなかった。それは、カリファスだけでなく、彼を取り巻くすべての者に共通しただろうか。その、望むと望まざるに関わりなく。

闇（前書き）

い。第三話です。少し長めになってしまいましたが、お付き合いください。

闇

明けない夜はないという、止まない雨もないという。それは、夜明けがどこからくるのかを、雨の上がった青く晴れた空を、知っているからだ。だが、それを知らない者にとって、夜はいつまでも夜であり、雨はいつまでも止むことはない。

太陽は一体、どこへ行ってしまったのだろうか。

サリハール、という嵐は過ぎ去ったはずであるのに、心を覆う暗雲は一向に晴れる気配をみせなかった。却って、苛立ちが増しただけでしかなく、ハドウエルは猜疑を込めてカリファスを責めた。見つめる視線の先で、カリファスは誰にも真似できないであろう優雅さでもって、長椅子に腰を下ろすと額にかかる前髪をかき上げた。

「カリファスさま、先ほどの、サリハール殿下に対するお言葉、まさかご本心ではありませんまい？」

祖国の恨みを晴らす機会を放棄した、カリファスはそう言った。いつかエドワルを弑して、ストイナの、今はもうその名をただ地名に留めるだけとなった故国の屈辱を晴らしてくれる、ハドウエルはそう信じていた。だが、カリファスにはその意思さえなかったのだろうか。それは、今もなおストイナの地で、カリファスを支持する者たちに対する裏切りに等しいのではないだろうか。

ハドウエルが見守る中、カリファスは正面を見据えて答えた。

「サリハール殿下には、偽りなき本心を申し上げた」

「では、カリファスさまは……」

「ハドウエル！」

続く言葉の先をハドウエルから奪うと、カリファスは珍しく声を荒げた。それで、この若者の声音の美しさが損なわれることはなかったが。

「わたしとて、恨みのすべてを忘れたわけではない。しかし、エドワル陛下が身罷られて、これ以上、誰を恨みに思えばよいのだ？」
うめくような口調は言葉だけではなく、これまでカリファスが心に流し続けた血までも一緒に吐き出しているかのように、ハドウェルには聞こえた。顔を伏せてうなだれる姿は純粹に美しい、と感嘆するには痛々しく、背中に流れる束ねた黒髪はカリファスが背負う闇そのものでもあるかのようにだった。

しかし、何故これほどまでの思いをしてまで、カリファスは耐え忍ばなければならないのだろうか。ハドウェルは思う、同じ忍耐を必要とするのなら、異なる生き方もあるのではないだろうか、と。その思いが言葉となつて、ハドウェルの口から発せられた。

「何故、戦おうとはなさらないのですか？ ストイナの地あまたで数多の者が屈辱に耐えながらも、マルニーム王国の支配を受け入れるのは、何のためにございましょうか」

「……」
「いつかカリファスさまがお戻りになられて、国土のすべてを解放してください、と信じているからなのではありませんか。そんな彼らのために、王として彼かの地に帰還するために、戦ってはくだらないのですか？」

「戦う？ このわたしが？」
顔を上げたカリファスは悲しげに笑つて、そして、首を左右に振ると静かに言葉を紡いだ。流れる声音は何物にも喩えようがないほど美しくあつたが、それ以上に口調は悲哀に満ちていた。

「わたしがそれをすれば、父上が護りたかつた『もの』を、すべて幻想にってしまうことになるだろう」

それが何だというのだろうか、ハドウェルは沈黙したが、内心はもどかしくてならない。何を躊躇い、何を恐れる必要があるというのだろうか。

「エドワル陛下、そして、それに連なる血筋を討つたところで、過去は戻ってはこない」

「過去を取り戻すことができずとも、カリファスさまが、ストイナ王国の正当なる継承者である、あなたがおられれば、王国を再興し未来を築いていくことはできましよう」

しかし、それでもカリファスは首を縦には振らなかった。

「ハドウエル、今のわたしにも、国はあるのだ」

「このような所にあつて、どこに国がある、とおおせになられるのですか？」

「……わたしは、父上を弱い人だと思つていた」

ハドウエルの背後に広がる、窓外の闇を見つめて自嘲気味につぶやいたカリファスの言葉は、ハドウエルの問いかけの答えとしては見当違いもはなはだしいものだった。だが、さらに続くカリファスの言葉を、ハドウエルは苛立たしさをいっそう募らせながらも聞き入った。カリファスは、決して無駄を語るようなことはしない。

歴史の古いストイナ王国は、文化と文明の起源だとされており、近隣諸国で広く「西海暦」が用いられる所以もそこにある。それは、国がその形を消失した現在も、同様であつた。

内陸にあつて陸の交通の要所を押さえるマルニアーム王国とは違い、海に面して海上貿易の中継地として発展してきたのがストイナ王国である。この二国に、軍事に強化したフェルタ王国を加えて、西海の三大王国と呼んだのはかつてのことである。

海のストイナ、陸のマルニアームと呼称される中で、フェルタ王国に付いたのが、剣のフェルタの異称であつた。この三国の均衡が他の小国を含む、「西海」の安寧を維持していたことは、否めない事実でもあつたらう。その均衡を最初に崩したのが、剣のフェルタであつた。

すべては西海からもたらされ、西海を通じて世界に広がる。これは、ストイナ王国の富を評した言葉で、マルニアーム王国はその富が妬ましかつたし、フェルタ王国は二国の富が欲しかつた。

あるいは、巨大に膨れ上がった軍事を持って余した結果であるのか、剣とは血塗られずして鞘に納まることのできないのか、フェルタ王国はマルニアーム王国に切っ先を向けた。それがストイナ王国でなかったのは、地理的にマルニアーム王国に隣接していたからにすぎず、それ以上の理由はなかった。

よって、宣戦の口実はいたって単純なもので、マルニアーム王国の国境巡検士の一団が越境してフェルタ王国領に「侵攻」した、というこじ付けだった。だが、一度開かれた戦端は、勝者と敗者を明確にするまで終わることを知らない。そして、後世において「ファブリック平原会戦」と命名される戦いくさにおいて勝利したのが、フェルタ王国だった。

勝者は敗者の側に講和の条件として、当時マルニアーム王国の次期女王として即位することが確定していたシスタリアにそれを放棄させ、代わりに自国の親王エドワルをシスタリアと婚姻させて王として即位させるよう強要した。西海暦三二六年、初夏のことである。やがて、マルニアーム王国の国王として即位し、国内を掌握したエドワルは母国フェルタ王国の父王が欲した富を求めて、ストイナ王国へ侵攻を開始した。マルニアームとストイナ、両方の富を掌中にすることが叶えば、西海の覇者にもなれるに違いないだろう。そうはいつても、フェルタ王国の支援は欠かすことができなかった。こうして、西海暦三四五年七月から、実に四年にも及ぶ「ストイナ戦役」が始まった。

しかし、マルニアームとフェルタの両国による、ストイナの富の分配は戦が終決して七年を経て、未だに確定してはいない。

フェルタ王国の支援を全面的に受けたマルニアーム王国は、圧倒的な物量を背景にして、破竹の勢いでストイナ王国を攻めた。それを四年に渡って戦線を維持し続けたストイナ王国も、よく善戦したと称賛するべきだろう。だが、物量の差は戦線の拡大と共に補いよ

うがなくなり、ついにストイナ王国に綻びが生じた。

一度生じた綻びに対して、取り繕う暇いとまをあたえることなく、マルニーム王国軍は一気に王都を目指し、ベルムアを包囲した。だが、ストイナの各地に散っていた部隊は集結を謀り、都を囲むマルニーム王国軍の後背を突こうとしていた。逆にいえば、それまで何を犠牲にしても耐え切ることができれば、勝機はストイナ王国の側にあったかもしれないのだ。

しかし、結果としてストイナ王国最後の王となったカリファスの父エングレンは、降伏という道を選択した。ベルムアを囲まれて二日目の朝、城壁の向こう側に現れたのは数台の櫓やぐらだった。堀を持たなかったベルムアの弱点を突かれたのだった。

巨大な攻城櫓を背にして現れた特使は、櫓を見上げる者たちに向けて、これ以上の抵抗を続けるのであれば火矢を放って都を焼く、と恫喝した。それで本当に王都が一切を残すことなく灰燼に帰することもなかっただろうが、実際に火矢が放たれていけば、戦という大義の名の元に行われた虐殺が敢行されていたかもしれない。

それが勝利のための唯一ではなかっただろうが、そうしなければ彼らとて背後を脅かされかねない。千載一遇の勝機がそこにあるのだ、とすれば躊躇う理由はなかったに違いない。エングレンが恐れたのがその可能性であったとして、彼が最も恐れたことは、このまま破滅の道を歩むことだった。

王国の独立と王家の存続、それよりも、民の生活と文化の継続により価値を見出した結果、エングレンは降伏を受け入れた。点が線を成し、線が形を作るのであれば、点はすべての源になれる。滅びてすべてを無に帰するよりかは、全体の中の点となって存続することを選んだのだ。

エングレンの想いを通じたのか、現段階において、ストイナ王国はマルニーム王国の支配を受けながらも、内政の自治を認められていた。ただし、マルニームの方針が何を置いても優先される、形骸だけの自治にすぎなかったが、少なくとも、点は残ったことに

なるだろう。

窓外に広がる夜の闇の中に、カリファスは在りし日のエングレンの姿を見付けて断言した。

「……小さな点であっても、文化の息吹を残すことができれば、降伏も屈辱にはならない」

見つめる闇の向こうで、父がうなずいてくれたように思うのは、カリファスの錯覚が見せた幻影だろうか。それでも、カリファスはその幻想を信じて続けた。

「父上は、そうお考えになられたのだろう。それでも、父上は玉座を汚されることを厭われて、城に自ら火を放つよう命じられた」

それが敗者にできる、勝者に対するささやかな抵抗であったろうか。そして同時に、エングレンの意地と矜持に対するささやかな勝利でもあっただろうか。燃え盛る炎の轟音は、エングレンの発した勝者に向けた嘲笑であったのかもしれない。

「わたしは、父上の遺志を護っていいこうと思う。いや、護りたいのだ。そのために、わたしは戦っていいこうと思う」

紡ぎ出されるカリファスの言葉を、ハドウエルは無言で聞いていた。もはや、苛立ちも腹立たしさもないようだった。

「戦いとは、何も血を流すことだけではない、とわたしは思うのだ。流血を伴わない戦い、それに勝利することができれば、父上の正しさを証明できるのではないだろうか」

「その戦いで、カリファスさまの敵は何にございましょうか？」

面と向かってそれを問われると、カリファスには即答できかねた。闇に映る幻像から答えを得ることは叶わなかったが、カリファスが護りたいと思うものなら明確な答えがあった。それは、父エングレンの遺志であり、さらにもうひとつあった。敵というのなら、それらを脅かす者のことでもいうのだろうか。

「わたしにとっての国である、この部屋と、わたしの国のただ一人いちごん

の民であるハドウェル、そして、部屋の外に広がる平和……」

そこで一度言葉を切ると、カリファスはハドウェルに微笑みかけた。そして、大事そうに言葉を続けていく。

「……そうしたささやかなものが保たれれば、ストイナの民も安寧を得ることができるようではないだろうか。それで永遠に滅びることのない、確かなものがあるはずなのだ」

明朗とした口調で、カリファスは言葉を結んだ。今はまだ、その確かなものが何であるのかわからないが、それでも、姉が望んだように生きることに対して貪欲なまでにあがいてみよう、とカリファスは思うのだった。

「カリファスさま、わたしだけでも、あなたのささやかな国の民であること、うれしく思います。ですが、民は、王の盾にもなり剣にもなれるのだ、どうかお心の隅にでもお留めおきください」

カリファスのためなら自分は死をも恐れないとハドウェルは言うのだ。思いは痛いほど伝わってくるというのに、今のカリファスにはハドウェルの思いに伝えてやれることができそうになかった。

「シスタリア王后陛下にお目にかかって、お悔やみ申し上げるのは明日にしよう」

今のカリファスには、それだけしか言えなかった。

ハドウェルが退室してひとりになった空間に、窓を叩く風の音が響いた。それは、小さな音だったが、他に阻む音もなくカリファスの注意を引くには充分だった。長椅子から立ち上がると、何かに導かれるようにして露台に出た。

風が湿気を含んでいるように感じられるのは、近づく雨季のせいだろうか。だが、星だけはあの日と同じように、天の高みにあつて燦然と瞬いていた。

「成人の祝いだ」

そう言つて、エドワルがカリファスにくれたのは、ストイナ王家

の紋章が刻まれた一本の剣^{けん}だった。同時にそれは、父エングレンが落城の折りに帯びていた剣でもあった。つまり、カリファスにとつて、形見ともいえた。手入れのなされた剣が見せた、妖しくも美しい白刃の輝きに、一瞬とはいえ心動かされなかった、と言えば完全な嘘になるだろう。

しかし、カリファスは自重した。エドワルをその場で刺し貫くことは、容易であったかもしれないが、続いたエドワルの言葉がカリファスを引き止めた。力強く響いた声音が、鼓膜の奥に甦る。

「おぬしが信じる正義を貫けばよい」

責任を負う覚悟があるのならこの自分を殺してみよ、そう言われたような気がした。だが、カリファスの信じる正義は、エドワルを貫くことになかった。ハドウエルにも語ったように、カリファスは「現在^{いま}」を護りたいだけなのだ。

「……それで、よろしいですか、父上」

もちろん、誰が答えてくれるわけではない。見上げた星空に、溜息をもらしてカリファスは露台を後にした。今のカリファスにとつて、剣とは不要な物でしかない。それを知らしめるためではなかったが、暖炉の上に飾った燭台にも白刃は存在しなかった。

「明かりを見付けることがおできにならないのでしたら、明かりを点せばよろしいではありませんの？ そのために、これを持ってまいりましたわ」

自分は暗闇の中にいるのだ、いつだったか、ラリアンヌにそう語ったことがある。そのカリファスの言葉をどのように解釈したのか、幾日かしたある日、ラリアンヌはそういつて燭台を贈ってくれた。胸の前で剣の柄を抱いて、首を傾げた乙女を意匠した銀細工の燭台である。乙女の抱いた柄に刃^{やいば}はなく、そこに蠟燭を立てることで初めて剣は白刃を得られることができる、というわけだ。

暖炉の前に立って、その燭台を手にとるとカリファスはつぶやい

た。

「ラリアンヌ姫、光明とは、自ら見出すものにございます」

もし、燭台に明かりを点すことで、闇から抜け出ることができ
のなら、そうしてみたい、と思わなくもない。だが、それでもカリ
ファスの抱える闇が晴れることがないことを、誰よりも彼自身が知
っていた。

そして、西海暦三五六一年二月二〇日、先王エドワルの喪が明け
るのを待たずして、サリハールは第二六代マルニアーム王国国王と
して即位する。

時間だけが、留まることを許すことなく流れていく。果たして、
どこへ導こうというのだろうか。生者の内でそれを知る者はいない。

前兆

西海曆二五六年二月二〇日、マルニアーム王国第二六代国王となったサリハールは、誇らしげに王冠を頭上に戴くと玉座に着いて、居並ぶ諸官諸侯を見渡した。この瞬間、サリハールは得意の絶頂にあった。自らが世界の中心にでもなったかのような、心地よささえ感じていたに違いない。

しかし、見上げた兄の姿に、光が射しているようにアリマールには思えなかった。実際、この日は朝から天空は暗雲に覆われ、即位及び戴冠の儀が終わるころ、外は冷たい冬の雨へと変わっていた。それは、来る未来の波乱を予知していただろうか。即位を急いだ兄の胸中と、ここにいたる半年ばかりの言動を思うと、アリマールは不安を覚えるのだった。

形式通りに式典が終わると、夜を迎えるころには新王の戴冠を祝した盛大な舞踏会が催された。着飾った紳士淑女が世辞を肴に酒を傾けながら、新王の統治下における自身の利害を素早く算出している。そうした間にも、華やかな衣裳をまとった令嬢たちを品定めすることを忘れない。陽気な音曲が流れ、艶やかな衣裳が華麗に翻った。

一段高い所にあつて会場を見渡していた新王は、侍従の差し出した酒を傾けて満足りうなずいた。サリハールがこの場にはいないカリファスに思いを馳せたのは、まさにこの時であつたらうと思われる。もちろん、哀れんだわけではない。自らの権威を誇示する絶好の機会を逃したように思えて、それが悔まれたにすぎない。カリファスの置かれた立場がいかに惨めなものか、思い知らせることもできたのではないだろうか、と。

しかし、カリファスは先王を弑逆した科人とがにんでもある。そのような

男を、宴席に招くわけにはいかないだろう。罪状を明らかにし、速やかに極刑に処すべきであるのに、これに関しては誰もが反対を主張するのだった。

宮廷医のひとりには、エドワルが毒殺された可能性を否定しなかった。何よりも、カリファスには動機がある。ただし、サリハールの主張する通り、カリファスの実行したことであつたとして、それを裏付ける証拠は何ひとつ存在しない。そもそも、どこから毒を持ち込めたというのだろうか。カリファスが首謀したにしても、彼に内通した者がいなければ毒を用意することもできないはずである。もちろん、同じく囚われの身であるハドウェルにできる仕事ではない。カリファスの罪を明らかにするには、まずは内通者を見付けなければならぬ、とする宰相を筆頭にした先王派の意見に圧されて、新王は一応にせよ手を引つ込めざるを得なかつた。

その宰相の姿を会場の一隅に見付けて、いつそのこと罷免してやるのか、と新王は腹立たしく考える。諸官の主だつた長を集めて談義をしているようだが、先王が身罷つたと同時に引退するのが筋であるだろう。それを、王太后となつたシスタリアだけでなく、各大臣からも宰相の留任を進言されては従うしかない。宰相ひとりのために大臣をすべて解任したのでは、統治が乱れないとも限らない。そうなれば、フェルタの伯父を喜ばせるだけだろう。

今朝も現れたフェルタ王国の領事が見せたり顔を思い出して、サリハールは小さく舌打ちをした。エドワルのところから遅滞している、ストイナの富の分配を求めてきたのだ。領土の半分はどう見繕つてみても虫がよすぎるだろうし、応じなければ一戦するも已む無しとは恫喝もすぎるといふものだ。

晴れがましい気分も消え去つてしまい、サリハールは露骨に舌打ちして侍従の不審を買つた。それをごまかすために、これまた会場に姿の見えないアリマールはどこにいるのか、と尋ねた。ただし、明確な答えを得ることはできず、苛立ちを募る一方だつたが。

暗い天の高みから落ちてくる雨粒は、砕けた星の欠片であるのだろうか。それとも、誰かが流した涙であるのだろうか。流れる楽音に背を向けて、アリマールは石畳の中庭を叩く雨を庇ひさしの下から見つめて大きな息を吐いた。吐き出した溜息は、大気に白く浮かんで消えていった。

「アリマール、ここにいたのですね？」

雨音に気配を忍ばせて近付いてきたのは、シスタリアだった。すらりとした長身で、誰もが認める美人である。結い上げたくすんだ金髪に、真珠の簪かんざしを挿していた。今夜、アリマールの金髪を飾るのも真珠であったが、ただの偶然であるにすぎない。

微笑して振り返ったアリマールだったが、その先に母の気鬱な顔を見付けて、彼は表情を改めた。息子が即位した、というのに母は一向にうれしそうではない様子だった。アリマール自身も、思いは母と同じであるから、シスタリアが何を憂いているのかは手に取るように分かるつもだ。

声をかけてはみたものの、続く言葉を模索しているのだろう。無言で横に並んだシスタリアに代わって、アリマールが口を開いた。雨は変わることなく、降り続いていった。

「あまりご心配なさいませんよう、母上」
「……………」

「カリファスどのが父上を毒殺したなどと、兄上おひとりがおおせになつたところで、聞く耳を持つ者はおりません」

一度は収めた微笑を浮かべて、アリマールは努めて陽気にそう言ったが、シスタリアは悲しげに首を横に振るだけだった。

「兄上は、ストイナの地を完全に併合してしまうつもりはありませんよ」

「……………いいえ、あなたが思うほど、あの子は利口には振る舞えないでしょう」

アリマールは冬の雨から母の横顔に視線を移して、その真意を疑

った。シスタリアはしばらく、夜を濡らす雨を見つめていたが、背後から聞こえていた音楽が途絶えたのを機に言葉を続けた。

「あの子は、サリハールはわかっているのではありません。カリファスがストイナそのものであることを。カリファスを弾劾することは、ストイナを弾劾することと同義なのだということも」

そこで言葉を切ると、シスタリアは夜の闇へと一歩だけ歩を進めて、アリマールを振り返った。昨日まで着ていた喪服ではなく、冬晴れの空のような青い衣裳の裾が雨だれに濡れている。アリマールを見つめるシスタリアの青い瞳に宿るのは、雨の滴であるのだろうか。その笑顔は夜を照らす十六夜の月のようだ、と称えたのは誰だっただろう。今夜も雨さえ降らなければ、十六夜からさらに欠けた月が虚空にあつたはずである。厚い雲が月を奪ってしまったが、シスタリアの笑顔を奪つたのは何であるのだろうか。

途絶えていた楽の音が、再び流れてきた。軽快で華やかな舞曲に乗るのは、陽気な笑い声ではなく、シスタリアの悲しい声音であった。

「今一度ストイナと戦火を交えることは、簡単なことです。ですが、今一度ストイナに勝利することは、容易なことではありません。彼らには、決して口実をあたえてはならないのです」

「母上……？」

「そのためにも、先王が存命であられたころ以上に、母はカリファスを弁護し擁護しましょう。アリマールもカリファスの味方をしてくれるのでしょうか？」

躊躇う理由が何であるのか見付けられず、アリマールは即答できなかった。再度、同意を求められて「はい」と短く応じたアリマールに微笑するシスタリアを目撃して、彼は奇妙な納得を覚えた。そして、背中を見せて去りゆく母の後ろ姿を見送って、納得は確信へと変わった。

これだから、兄はカリファスを許すことができず、憎しみを募らせるのだらう。背後から流れてくる音曲と、夜の闇に響く雨音を聞きながらアリマールは考えずにはいられなかった。

母にとつて、カリファスは鏡に映る己自身なのだ。だが、父母という鏡に自己を映そうとする者にとつて、そこに映り込む存在は疎ましく見えたに違いない。自分だけを映すには、邪魔なカリファスを排除するより方法を見付けられなかったのだらう。そして、排除しようとするほど、影はいつそう大きくなって、鏡を覗く者を拒むことになったのだ。

それは、単純に「嫉妬」と呼ばれる感情であつただらうか。

マルニアーム王国の王の一人娘として生を受けたシスタリアは、王と後の愛情を独占して成長した。成人すれば然るべき家から夫を迎えて、マルニアームの歴史でも稀有な女王となるはずだった。それが、フェルタ王国との戦いに敗れて、シスタリアの運命は大きく転換した。それまで、偽りと戯れの恋に興じていればよかつただけの乙女は、顔さえ知らないフェルタ王国の第二親王エドワルを迎えて、その後にならなければならなかった。

婚姻自体はシスタリア自身の問題であつたが、彼女自身に決定権があるわけではなく、彼女の意向など考慮される余地とてなかった。王家に生を受けた女として、あたえられた運命をシスタリアは受け入れた。

もしも、シスタリアが運命を拒絶していたならば、両国はさらなる戦に突き進んでいたかもしれない。少なくとも、フェルタ王国が黙って引き下がることはなかったはずだ。シスタリアに提示された運命は、否と首を振る我がままさえ許されなかったのだ。

この婚姻がひとまずの悲劇を回避したのだ、としても、それ以後の悲劇の起因となつたことも、またひとつの事実であつたかもしれない。それで一体、シスタリアに何の責任があるというのだらう。

戦によって運命を変えられたシスタリアにとって、同じように戦に運命の変遷を強いられたカリファスに、かつての己を重ねたのはあるいは必然であったかもしれない。しかも、少年は自身よりもさらなる過酷な運命を背負って現れたのだ。引き結んだ唇に精一杯の虚勢を張って、毅然と佇む少年の瞳には不安と恐怖が宿っていた。それでも、傲然と頭を上げ正面を見据える姿は、さすがはストイナ王家の男子である、とエドワルさえも唸らせたものである。

しかし、シスタリアは目の前に佇立した少年を、優しく抱きしめて、その耳元にささやいた。

「何も恐れることはありません。今はまだ、運命はあなたに冷淡であつたとしても、必ず運命はそれに似合うだけの幸福をあたえてくれるでしょうから」

シスタリアにとつて、不幸と思えた結婚はこれ以上ないほどの幸福となつた。エドワルはシスタリアを誰よりも深く愛してくれたい、彼女もまた彼を愛した。過去きつうを幸せに思えなくとも、現在いまを幸せに思えればいい、それで、未来あすの幸せを願うこともできるのだから。カリファスにもいつかは幸福な時間ときが訪れるに違いない、とシスタリアは深く信じた。

こうして、シスタリアはエドワルの死後、実に五年にも渡ってカリファスをサリハールの脅威から護り続けた。彼女自身が息を引き取る、その最期の瞬間までカリファスを案じ続けた。喩えそれが偽りであろうとも、築かれた安寧を壊したくなかつただけであつたかもしれない。それとも、これ以上誰かが戦によって、運命を変えられる様を見たくはなかつただけであつたかもしれない。

そうであるのだとすれば、彼女の願いは運命を司る何者かの失笑を買うだけのものではなかつた。

つむじ風

幸福から目を背ければ不幸しか映らないのだとしたら、不幸から目を背ければ幸福だけが映るのだろうか。

先王エドワルの国葬と新王サリハールの即位、二つの相反する行事も無事に終わり、新年の祝賀も落ち着きを見せ始めた、西海暦三五七年一月も半ばをすぎたある日のことだった。その日は、春を先取りしたかのような陽気を受けて、冬のただ中であるにもかかわらず温かい一日となった。

そんな日の午後、カリファスはシスタリアの訪問を受けた。サリハールの即位を機に喪服を脱いだシスタリアは、明るい緑の衣裳をまとっていた。袖口と裾周りには緻密な花の刺繍がなされており、待ちわびる春の到来を、そこに見るような華やかな刺繍だった。

衣裳の裾を優雅に広げて長椅子に座ったシスタリアは、佇立したままのカリファスに、自身の隣に着席するよう勧める。思い返せば、子供のころからこうやってカリファスを隣に座らせては、彼の身を案じてくれたものである。

「このところ、部屋にばかりこもっているそうですね？」

そうシスタリアから問われて、カリファスは返答に窮した。いいえ、と答えれば嘘になる。だからといって、はい、と応じればシスタリアを心配させるだけだろう。結局、どちらも選べずにカリファスが沈黙していると、シスタリアが言葉を続けた。

「少し、庭を歩いてみませんか？」

そういうと、シスタリアは自身の侍女を振り返って、カリファスの外套を用意させた。別室から侍女が持ってきた外套を、カリファスがまとう時間も惜しむようにして部屋の外へと連れ出した。そして、廊下を並んで歩いていると、正面から慌ただしい足音が響いて

きた。何事だろうか、と凶事の予感に足を止めたカリファスとは対照的に、シスタリアは悠然と歩を進めていく。

廊下の曲がり角から姿を見せたのは、シスタリアの侍女のひとりで、後ろに従う侍女とは違って老年の女だった。その侍女は女主人の前で一礼すると、彼女の耳元に何事かをささやき始める。その言葉にうなずいたシスタリアは、大袈裟にすぎるほど驚いて見せた。

「まあ、それは大変！」

そして、カリファスを振り返って続ける。

「カリファス、『春の庭』へ先に行って待っていてください。わたしは所用をすませてから、すぐに参りますから」

「何事が起きたのですか？」

騒ぐ心を抑えて、カリファスが問いかけると、シスタリアは笑って言った。

「あなたが気に病むほどのことはありません。それよりも、『春の庭』ですよ、間違えないように」

シスタリアがカリファスに指示した「春の庭」は、当然のことながら、あきれるほど広い王宮の中庭のひとつである。点在する花壇の今はまだ、地中に眠る花の芽もやがては訪れる春に咲きそろえば、この中庭に着飾った人々が参集して賑やかな園遊会が催されることになっている。ただそのためだけに設けられた庭を、「春の庭」と呼んだ。冬の間の寂しいだけの庭を、わざわざ好んで散策する者はまず誰もいない。

その「春の庭」を当てもなく歩いたカリファスは、思いもかけない人物を見付けることになった。

赤煉瓦の建物を背景にして、冬枯れの木立が規則正しく整列するその下、等間隔に並んだ石造りのベンチに、腰をかけてうつむいているのは、ラリアンヌその人であった。

明るい茶色の温かそうな衣裳をまとって、膝の上には本を乗せ、

その上に両手を重ねて置いたララリアン又の姿は、まるで置き忘れられた人形のように果敢無く見えた。歩み寄るカリファスの足音に降り注ぐ陽光に輝く肩にかかる黄金の流れを、誰もが認める美しい髪を揺らして、ララリアン又は顔を上げた。

その瞬間、カリファスの視線がララリアン又の眼差しと交差した。距離にして、五歩くらいだろうか。言葉もなく歩みまでも止めてしまったカリファスを、ララリアン又は無言で見返してくる。

いつもであれば、アリマールが同席していたし、そうでなくとも、侍女の二、三人は必ずララリアン又のそばにいた。彼、もしくは、彼女らが両者に席を勧め、会話まで用意してくれるのが常だった。不器用な王子と、初心な姫君の仲を「橋渡し」してくれる存在は、この日は誰もなく両者はそのまましばらく互いを見つめあった。

一体、どれくらいの時間を両者はそうやって、ただ見つめあっていただろうか。痺れを切らした意地悪な風が、砂塵を巻き上げて吹き抜けていかなければ、いつまでもそうしていたかもしれない。風から身をかばうように、カリファスは佇立したまま片手を上げ、ララリアン又は座したままでこちらも片手を上げて、風に背中を向けるために上体を小さくよじった。その拍子に、膝の上の本が滑り落ちてしまった。

慌てて本を拾い上げようとララリアン又の伸ばした手に、カリファスの手が触れた。ララリアン又は驚いて手を引っ込めて、そのままカリファスの手が触れた自身の右手を胸の前で、愛おしそうに左手に包み込んだ。

一瞬だけ躊躇うように握りしめた手を解いて、カリファスはララリアン又の足元に落ちた本を拾い上げて、大袈裟に埃を払うとつむいている彼女に差し出した。差し出されたそれを、ララリアン又は受け取る代わりに、ささやくような小さな声で問いかけてきた。

「どうして、カリファスさまがいらっしやるのですの？」

「王太后陛下に、こちらで待つよう言われたのです」

「わたくしも、同じですね。お母さまから、ここで待つように、と……」

そのラリアンヌの言葉で、カリファスは確信した。これが、シスタリアの来訪の真意だったのだ、と。別れる間際に見せた驚きは、シスタリアの芝居であったのだ。思えば、シスタリアの驚き方は不自然ではなかったか。

「サリハール兄さまから、カリファスさまとお会いしてはならないといわれているのです。それが、こうしてお会いできたのです。わたくしが、どれだけ驚いたか、おわかりになりました?」

そう言って、ラリアンヌはようやく顔を上げた。喜びに微笑む様の愛らしさに対して、カリファスは何と言えばよいのかわからなかった。こんな時、アリマールがいれば気の利いた言葉のひとつでも口にして、場の空気を和ませてくれるのだが。

そのアリマールの代わりに、この場に緊張を呼び込んだのは、ラリアンヌのもうひとりの兄、彼女にカリファスと会うことまでも禁じたサリハールだった。

後日、ラリアンヌはどれだけ後悔したことだろうか。何故、あの時にもう少しちゃんとカリファスと話さなかったのだろうか、とあまりに突然現れたカリファスに驚いて、それ以上に、うれしくて言葉は何も出てはこなかったのだ。それで、どれだけの時間を無駄にってしまったことだろうか。あの時間は永遠に続いていくのだ、と思っていたのだ。

しかし、ラリアンヌの後悔は後日のことであって、この瞬間のことではなかった。

「その詩集の最初の作品……」

未だカリファスが立っただままであることにさえ気が付かないで、ラリアンヌは彼が拾ってくれた本を指して笑いかけた。母が持参

するように、と勧めてくれた詩集で、昨今人気の詩人が著わした社交界でも話題の詩集である。そのことをララリアン又は説明して、さらにその内容をカリファスに紹介しようとした矢先のことだった。近付いてくる複数の足音に、ララリアン又は母が来たのだ、と足音のする方に視線を向けた。それで言いかけた言葉の先が、永遠に断たれるなどと思いもしなかったことだ。まさか、この今は誰からも見捨てられた「春の庭」に、サリハールが現れようなどと誰に想像することができただろうか。

「ララリアン又、わが妹、何を勝手な真似をしているのだ？」

背後に三人の騎士を引き連れて、サリハールはララリアン又に向けてそう言った。口元から顔全体へと広がった笑みは、ララリアン又に恐怖をあたえるに充分だった。発せられる言葉は呪詛ではないか、とララリアン又には思えた。

「部屋を訪ねれば、侍女どもがララリアン又はここにいるだろう、と簡単に教えてくれたぞ」

「……」

「誰かと一緒だろうとは予測したが、余には知れぬと置いていたか？」

一人称を改めたサリハールは、ララリアン又にとって見知らぬ異国の王でしかなかった。傍らに佇立するカリファスの服の裾を知らずの内に握りしめて、ララリアン又はサリハールを見返した。視線を逸らすことが、単純に恐ろしかっただけであっただが、サリハールの方から視線を逸らしてくれたのは、ただの偶然ではなかった。サリハールの視線の赴く先を追ったララリアン又は、それが自身の握りしめた手にあるのだ、と知って慌ててカリファスの服の裾を離した。そうしなければ、カリファスまで巻き添えにしてしまうのではないだろうか、と思ったのだ。

しかし、時すでに遅く、サリハールの矛先はカリファスに向けられた。

「カリファス、ララリアン又はフェルタ王国の、われらが従兄どの

といずれは婚約させるつもりだ。横恋慕などされては、迷惑というもの」

驚いたのは、ラリアンヌも同様だった。見上げた視線の先に、カリファスの眼差しがあった。交差する両者の思いを断ち切ったのは、サリハールの次の言葉である。

「ラリアンヌを部屋へ連れて行け」

背後の騎士に向けて命じたサリハールは、忠実に命令を実行する騎士を確認して満足そうに笑った。

「……カリファスさま！」

両脇を騎士に挟まれて、それでも、ラリアンヌは懸命に手を伸ばした。だが、その手がつかんだのは、螺旋を描いて天空へ昇る風でしかなかった。

さすがのように伸びたラリアンヌの手は無論のこと、彼を追い求める彼女の視線からも逃げ出して、カリファスは下を向いていた。懸命にカリファスと呼んでいたラリアンヌの悲鳴が、風の向こう側から今も聞こえてくるのは気のせいだろうか。

奪われることに慣らされた結果、奪われてもそれを当然と思い、あきらめるもうひとりの存在をカリファスは自身の内に見付けていた。だから、目の前からラリアンヌが連れ去られても、心動かされるはずなどない。それだというのに、何故、これほどまでに気持ち乱れるのだろうか。

天空を見上げたのは、そうしなければ、あふれてくる思いを抑えることができなかったからだ。カリファスは、青くどこまでも青く続いていく彼方を見つめた。そして、強く握りしめた掌の中にある、ラリアンヌが残っていた詩集に、カリファスは視線を落とした。確か、最初の作品だ、とラリアンヌは言っていなかったか。

表紙を開いて、頁を捲る。そこに綴られた文字の羅列を目で追っ
てから、カリファスは再び天空を見上げて思いを馳せた。カリファ

スの周囲を、風はまるで意思ある者のように吹き抜けていった。

風に乗せて伝えよか 届かぬ想いわが涙

風に心があつたなら

届かぬ想い雲にして あなたの空へと運ぶだろう

もしも、太陽陰つたら わたしのことを考えて

届かぬ想い わが胸に

鳥にゆだねて伝えよか 届かぬ想いわが祈り

鳥に言葉を話せたら

届かぬ想い歌にして あなたの窓辺に運ぶだろう

だから、さえずり聞こえたら わたしのことを考えて

届かぬ想い わが胸に

届かぬ想い いつまでも……

追想

……あなたを慕って流した涙は、風に乗せて伝えましょうか。風に意思があれば、あなたを慕うこの想いは天空を渡る雲にでもして、あなたの元へと運んでくれるでしょう。だからせめて、太陽が雲に陰った時には、わたしのことを思い出してください。どうしても、想いを伝えられないのでしょうか。

……あなたの息災を願う祈りの言葉は、鳥にゆだねて伝えましょうか。鳥にわたしの言葉を理解することができたなら、あなたの元に歌にでも替えて届けてくれるでしょう。だからせめて、鳥のさえずりが聞こえた時には、わたしのことを思い出してください。どうしても、想いを伝えられないのでしょうか。

……あなたのことを、わたしはいつまでも慕い続けております。

『届かぬ想い』より、述懐

冬が終わって、季節は春を迎える。色を失っていた景色は待ちわびていた春の到来に、それまで地中深くで眠っていた花々が芽吹いて、多種多様な彩りを添えていく。花の季節が終わるころ山は新緑に包まれ、田畑を潤す恵みの雨季あめが訪れる。陰鬱な雨の季節が終わると、太陽の照り付ける夏が始まり、そして、秋が忍んでくる。山の木々が色付き始め、やがて、冷たくなる風に枯葉が散るころには、冬は目の前にまで迫っている。木々は枯れ、寒風に雪の舞う冬がすぎると、再びの春に喜ぶ。

そうやって、何度か四季が巡った西海暦三六〇年、夏の盛りの八月九日、マルニアーム王国の王妹ラリアンヌとフェルタ王国の第一親王にして王太子エリッツの婚約が成立したことが、両国において公表された。とりあえずの婚約で、婚礼の儀は未定とされたが、一説では旧ストイナ王国領を完全併合した後に執り行われるのではないか、と噂された。

流言の裏付けとして、マルニアーム王国国王サリハールが取った政策があった。

ストイナの自治政権を支える強力な地盤となっている、商都ルギア二の商人から成る組合の解体と、明け渡しを要求したのだ。王都とは離れた沿岸部に位置するルギア二は、戦災を免れて王都陥落後もそれまでと何ら変わることなく、商いを続けてきた。王家の直轄地であったこともあって、これまで歴代の王たちの多大な庇護を受けてきた町である。先王エングレン亡き今も、その王家に対する忠誠に一点の曇りはない。

そして、それが彼らの矜持でもあった。マルニアーム王国の要求は、その彼らの矜持を傷付けたのだ。さらに、自治政権の解散を迫られては、ストイナの憤りが頂点に達したことは間違いないだろう。これで、カリファスの身がマルニアームになれば、自治と自主、そして、自尊を掲げて一戦することも躊躇いはしなかったはずだ。

「……結局、カリファスどのを盾にとつて、兄上はやりたい放題しようということなのだろう」

夏のうだるような暑さも過ぎ去り、秋の気配が感じられるようになった九月の終わりの午後、アリマールはカリファスを「春の庭」に誘い出してそう言った。もちろん、ここがカリファスにとって、忘れ難い場所であることをアリマールは承知で誘ったのだ。

シスタリアに仕組まれて、必然的に二人は遭遇したのだ。時間の

長短はいざ知らず、恋のひとつ語らうこともできないまま、サリハールによって引き離されたいきさつは、ラリアンヌから聞いたアリマールだった。カリファスさまはどうしていらっしやるのでしょ
うか、涙を懸命にこらえて、そうつぶやいた妹は自らの運命みらいよりもカリファスの明日みらいを案じているようだった。

そして、そのカリファスが案じるのは自身の身の上ではなく、ストイナの動静なのだろう。背後に付き従うハドウェルも思いは同じ
ようで、交わされる言葉に聞き耳を立てていることが気配で感じら
れる。アリマールは言葉を選びながら、ゆっくりとした口調で続け
た。

「だが、兄上の無茶な要求を、ストイナの政権は拒絶した」

「……」

「何もすぐに、戦いくさということにはならないだろう。ストイナとして
も、激発してカリファスどのの身を危険にさらしたくはないのだろ
うし、兄上にしてもこちらから戦をしかけても分がないことは、ど
うやら承知しているようだ」

そこまで語って、アリマールは一度言葉を切った。そして、並ん
で歩くカリファスの美貌を覗き込む。今年で二〇歳を迎えたその容
貌は、絶世と呼んでも決して過言ではないだろう。男として生まれ
てきたことが、実に惜しまれる優艶の美を宿していた。だが、女と
して生まれていれば、別の運命をたどっていたかもしれない。その
場合、どちらがより幸福であったのか、それを勝者の側に立つアリ
マールが論じてよいことではないだろう。

「あるいは……」

感情を隠して冷淡にも思えるカリファスの横顔から、見えてきた
アシエリアの、葉を茂らせた緑の並木に視線を移してアリマールは
独り言のようにつぶやいた。

「……あるいは、兄上はストイナを挑発しているのかもしれない」
「何のために、そのようなことを？」

変わらぬカリファスの美声が、わずかに震えているのは、それに

対する答えを予感しているのかもしれない。ストイナを激発させてそれを理由に一戦するため、その布石としてラリアンヌをエリッツと婚約させた。再び、フェルタの力を必要とするためだとして、婚礼を急がないのは、ラリアンヌを人質に差し出したが最後、協定を破る可能性を考慮したのかもしれない。フェルタにとって、マルニアームとストイナの両国が共に倒れることは、願ってもないことであるに違いないからだ。

しかし、アリマールはそれらすべての言葉を呑み込んだ。憶測で口にするには、あまりにも危険がすぎる。そこで、彼は別の言葉で答えた。

「わからない」

そして、内心で苦笑する。三番目の答えだ、アリマールはハドウエルを肩越しに振り返って思った。夏の名残りを含んだ風が、アリマールの金髪を揺らした。

麗らかな春に咲く花、もしくは、春に咲く麗しき花、二つの意味を持つ麗春花れいしゅんかとも呼ばれるアシエリアは、厳しい冬の寒さを耐えて、春の暖かな陽気に薄紅の花を無数に咲かせる。五弁の小さな花は、幹から伸びた枝を賑わせ、満開を迎えると同時に散り始める。

その絢爛と咲き誇っていた名残りの跡もなく、今は茂った緑に揺らめくだけであった。やがて、秋が深まるにつれて緑の葉は赤く色付き初め、冬を間近にするころには赤く染まって枯れ落ちる。

花の華麗さには劣るものの、風にそよぐ赤い葉が、観賞に耐えないわけではない。だが、「春の庭」と呼ばれるように、舞い落ちる葉に美を見出す者は少なかった。枯れ葉などただのゴミでしかないというわけだが、アリマールはそう思わなかった。赤く染まった葉が、風に揺れる様にも趣はあるのだ。

「赤煉瓦を背景にして、燃えるように染まったアシエリアも、それは見事なものだ」

未だ色付く気配も見せない緑のアシエリアを右手に見ながら、アリマールはそう言った。そして、そのころにもう一度、と続けようとして止めたのは、左を歩いてきたカリファスが足を止めたからだった。

「カリファスどの……？」

呼びかけてはみたものの、カリファスにはアリマールの声が届いていないようだった。瞬きするのまはたも忘れて、一点を凝視するカリファスの視線を追った先にあるのは、整然と幾つも並べられた石のベンチ、そのひとつだった。

足を止めたカリファスを怪訝そうに見つめるハドウェルとは違って、アリマールにはその理由を想像することができた。

おそらく、このベンチでラリアンヌに遭遇し、同時に、このベンチでラリアンヌが連れ去られたのだろう。そう言えば、語弊があるかもしれない、何といても連れ去ったのはラリアンヌにとつては兄になるのだから。

しかし、カリファスの心情を思えば、あながち間違いでもないだろう。あの冬の一日を最後に、二人は偶然と必然の別なく、一度も互いの姿さえ見てはいないはずだ。

半ば茫然としたまま、新たな一步を踏み出すカリファスを視線で追って、何とかしてはやれないものだろうか、とアリマールは溜息をもらした。

確かに、ラリアンヌにはカリファスとは別の婚約者がいるわけで、許婚者でなくなったカリファスを相手に恋を語らうことは、それを取り決めたサリハールにしてみればおもしろいことではないだろう。だからといって、実の妹に自身の配下の騎士を三人も張り付けて監視させることもないだろう。フェルタ王国に配慮した結果、というよりも、ただの子供じみた嫌がらせでしかない。

ベンチの前で足を止めたカリファスは、そこに何を見ているのだろうか。腰に届きそうなくらいに伸びた、彼の黒く流れるような長い髪を背中で束ねる紫の組み紐は、ラリアンヌが編んだ物だ。そ

れに編み込まれた思いとは、どれほどのものだろうか。アリマールの口から自然ともれる溜息は、見守る視線の先で微動だにしないカリファスの、その身にまとった優美さに対する称賛ではなかった。

王弟殿下、と呼称されるようになって、無官の身であるアリマールは比較的自由に振る舞うことが可能であった。時間を持て余すほど暇ではなかったが、妹の元にカリファスの近況を報せてやることを自らの義務と定めて、折を見てはラリアン又の居間を訪ねていた。あと一月もすれば、一七歳を迎えるラリアン又は、いつまでも少女のまま留まることを許されず、幼さを残しながらも大人としての魅力も備えつつあった。

ラリアン又はアリマールの来訪を喜んでくれたが、無粋な監視人たちが快く思っていないことは確かめるまでもないだろう。だが、それを気にしては、彼らの前でカリファスのことを語ることもなごできもしない。もしかしたら、彼らからサリハールに報告が届いているかもしれないが、兄からは今のところ何の咎めもない。

咎め、といえば、サリハールはカリファスを弾劾することを止めた。別の利用価値を見出した結果であるのだろうが、サリハールの思惑は別として、ラリアン又はそのことを素直に喜んでいた。

たったそれだけで一喜一憂するのだ、と思えば妹が愛おしくもあり、哀れでもあった。

「アリマール兄さま、これを……」

いつもではなかったが、そう言ってラリアン又は、アリマールに組み紐を差し出す。一年ほど前から始まって、先ほど、七本目を渡された。最初の色は赤、次いで、^{オレンジ}橙、黄、緑、青、藍、と続いて最後の色が紫だった。虹を構成する七色であるが、虹が天と地をつなぐように自己とカリファスを七色の組み紐でつなぐようとしているのかもしれない。

そして、この組み紐を誰に渡してほしい、とも言わなかった。お

そらく、言わないのではなく、言えないのだろう。新たな婚約者エリッツに、というのであれば、サリハールも文句はないだろうが、それがカリファスのためだ、と知れば不快に思っ何を言い出すか知れない。

そこで、ラリアン又は続けて言うのだった。

「……どなたにお譲りなさっても、構いませんわ」

どうかカリファスさまに、ラリアン又の青い瞳が、アリマールにそう語りかけていた。

しばらくそうやって、ベンチの前に佇んでいたカリファスだったが、その下で何かを見付けたようで、腰をかがめて拾い上げた。何だろうか、とアリマールが伺い見れば、鳥が落としていった薄茶の羽根のようだった。最低でも午前と午後と、日に二度は掃除のなされる庭で珍しい落し物があるものだ、と空を見上げて鳥の姿などどこにも見えない。

しかし、拾い上げたカリファスは、いとおしむように見つめて優しく埃を払う。単純に珍品を見付けた、というにしては大袈裟にすぎ。言ってしまったは何だが、ただか鳥の羽根でしかない。

「カリファスどのは、鳥の羽根でも集める趣味を、お持ちであったか？」

不思議に思っ、アリマールはハドウエルを振り返って問いかけてみた。そうしてみたところで、返ってくる答えは三通りしかない。ハドウエルにとって、アリマールは主の友人ではなく、あくまでも祖国の敵でしかないようで、何年経とうが慣れ合う気は毛頭ないようだった。

案の定、ハドウエルの答えは簡潔な一言に終わった。

「わかりません」

これまで、アリマールがハドウエルに問いかけて得た答えの、三番目に聞いたものである。一番目が、はい、であり二番目が、いい

え、である。この三つで、大概の会話は成立する。それ以外に話す声を聞いたことがない、というわけではないが、カリファスと会話する台詞はアリマールに向けられたものではなく、数の内には入らないだろう。あとひとつ、沈黙も同様である。

四番目の選択肢を選ばれなかっただけでもありがたく思うべきか、アリマールは「そうか」と短く応じて、さらにカリファスの行動を見守った。自身が観察されていることに、気が付かないはずもないだろうが、カリファスは拾った羽根を、そのままポケットにしまい込んでしまったのだ。

もし、アリマールがあの日、ラリアンヌがカリファスに残していった詩集の存在を知っていたら、彼の行為にも納得したとだろう。ラリアンヌが鳥にゆだねた祈りの言葉、羽根はそれを伝えようとしているのだ、と。だが、アリマールはそこまで知らないのだった。

「王弟殿下、そろそろ、戻りませんか？」

立ち上がった、振り返ったカリファスの、そう言った表情がいつになく晴れやかに見えるのは、アリマールの気のせいばかりではなかった。斜めに照り射す午後の陽が、瞬間だけ陰って見えたのも。

その年、西海暦三六〇年も残すところ三カ月余りとなったが、まだすべてが終わったわけではない。

追想（後書き）

今回、いきなり三年ほど飛び越えておりますが、その間の挿話として、「空白の歴史 外伝（秋風）」なるものを投稿しております。もしよろしければ、そちらも読んでみてください。よろしくお願ひします。

仮想

歴史に「もしも」は許されない。その埋もれてしまった可能性を惜しむのは、勝者の傲慢であり敗者の未練であるのだろうか。それでも、惜しまずにはいられない過去がある。

しかし、もしもあの時、幾ら悔んでも還ってはこない、それが歴史であるのだろうか。

それはまだ、カリファスが子供のころのことだった。

度重なる環境の変化が、体調に異変をあたえたのだとしても不思議ではないだろう。ストイナ王国領を後にして、マルニアーム王国王都デイエンテに移り住んで一月ひしつきしたころ、カリファスは原因不明の高熱を発して寝付いたことがあった。あるいは、このまま死んでしまうのではないだろうか、と病床に着いたカリファスは子供心に考えたものである。姉は彼に生きることが望んだが、会いにきた弟を追い返すような真似はしないだろう。

しかし、死者の意向は図りがたいが、生者はカリファスに生きることを望んだ。

「死なせてはならぬ。何としても助けよ」

医師を叱咤するエドワルの声が、熱に浮かされるカリファスの耳に微かに届いた。高熱に倒れて五日、一向に快復の兆しをみせないカリファスを、エドワルが純粹に案じたわけではなかった。そのことは、続いた言葉が証明した。

「カリファスにこのまま死なれては、せつかく得た物を、これから得ようとする物を、すべて失うことになる。新たな領土、ストイナの平穩は、この子供にあるのだから」

後世、ストイナ戦役と呼ばれる戦いくさが終結して、まだ半年に満たない。今ここでカリファスが死にでもすれば、ストイナ王国はマルニ

アーム王国の陰謀だとして、エングレンを幽閉先から解放しようとするだろう。それが叶わなくとも、彼らに復讐という大義をあたえてやることにもなりかねない。この復讐というものは、時に麻薬にも似て人を酔わせる魔力を秘めている。再び戦端を開いて、先の見えない戦い突入する必要などない。カリファスさえ生きていれば、ストイナ王国はマルニアーム王国に対して、手も足も出すこととはできないのだから。

当時、子供でしかなかったカリファスに、そこまで理解することはできなかった。ただ、自分は生きていればいいだけの存在なのだろうか、と少年は薄く目を開けた。虚ろな視線の先に見えたのは、シスタリアの優しい微笑みだった。大丈夫ですよ、つぶやいてシスタリアはカリファスの額に手を当ててくれた。火照った顔ほてにその手は冷たく心地よくもあり、さらなる眠りに身をゆだねてカリファスは目を閉じた。

そうやって、シスタリアがずっと傍らに着いていてくれたことをカリファスが知ったのは、ずいぶんと後になってからことだった。そのことがすでに自我を確立させていたサリハールに、不満をあたる結果となったのだとして、これは彼自身でさえ気が付いていないだろう。母親の関心が他に移ってしまったのではないか、という不安を埋めるためにカリファスを憎悪するしかなかったのだ、といまさらサリハールが認めることはないだろう。また、カリファスが知り得る範疇のことでもない。

そして、シスタリアがどのような思いで、カリファスを看病したか、これもまた他者の図り知るところではないだろう。エドワールとの間に授かった三人の子が、運命の気紛れに翻弄される様を見たくなかった、たったそれだけの理由であり、それで充分であったはずだ。それに別の感情が加わるのだとしたら、何がきっかけであったのだろうか。

それは、カリファスでさえ記憶に留めない、一夜の彼の発した一言であったかもしれない。朦朧とする意識が、少年に幻覚を見せた

のだろう。さまよう視線をシスタリアに向けて、カリファスはささやいた。

「……ははうえ？」

シスタリアを見間違えただけなのだとしても、母と姉を亡くし、残った唯一の肉親である父王とは引き離され、ひとりの従者だけを頼りとして異国の地で暮らす少年の、心細さを如実に物語る一言ではなかつたろうか。気丈に振る舞う少年の、内面に抱く畏れおそを垣間見た瞬間であつた。

カリファスが覚えているのは、迎えにきた母の手から、現世うつしよへと引き戻してくれたのがシスタリアであつたということだろうか。その腕かひなに抱かれて、長くなり始めた黒髪をなでてもらった、あの安らぎにも似た優しい温もりだけは鮮明に覚えていた。カリファスの熱が引いたのは、その翌日のことだつた。

それから時は移ろつて、少年は若者へと成長した。

発言者の意図が理解できなかった。ただ、自分がマルニアーム王国にとつての手駒でしかないのだ、ということだけは理解できた。それだけは、過去も現在も、そして、未来までも変わることはない。そうであるならば、子供でしかなかったあの折に、迎えにきた母の手を離さずにいればよかつたのだろうか、と思うのは、カリファスの僻みひがでしかないのだろうか。

西海暦三六〇年も一ヶ月を残すだけとなつた、冬の午後だつた。マルニアーム王国王都ディエンテ、狭隘な盆地のほぼ中央にある王宮、そこにあたえられたカリファスの居間である。長く斜めに射し込む陽光が窓辺を温め、暖炉では負けじとばかりに炎が爆ぜる。その音だけが、静まり返つた室内に響く。

ここ数年で変化したことといえば、新たに円卓と肘掛け椅子が二脚増えたことだつた。それにともなつて、それまで部屋の中央を占めていた長椅子は、暖炉の前へと場所を移した。それでも、シスタ

リアは長椅子で、カリファスを横に座らせる習慣を改めたりはしなかった。今も、そうやって、シスタリアは確固たる意思を示して、カリファスの青い瞳を覗き込んでくる。

問いかけるかのように、あるいは、試してでもいるかのように、シスタリアはカリファスを見つめて言葉を紡いでいく。

「サリハールは、やりすぎたのです。ストイナの憤懣^{ふんまん}は、日に日に強まる一方です」

商都ルギア二の利権の放棄と自治権の返上、マルニアーム王国から突き付けられたこの二点の要求を、旧ストイナ王国の自治政権は毅然と拒否した。賠償金だとか安全保障税だとか、あるいは、講和金だとか、色々御託を並べては要求される金銭の支払いを、自治政権側は一度として断ったこともなければ、滞ったこともない。

戸籍ばかりでなく、港の数に国内の街道、城塞の場所、果ては町から村まですべてを記した絵図までも隠すことなく、敗者は勝者に差し出している。四年に渡ったストイナ戦役で活躍した將軍たちが、焼け落ちた王城の跡地で極刑に処されることにも目をつぶってきた。王は幽閉され、王子は連れ去れ、后と姫は自裁した。

そうした上で、ストイナ王国はかろうじて自治の承認を先王エドワルから得たのだ。これ以上の理不尽を受け入れる必要を認めることができなかったことは当然であったかもしれない。

しかし、満場一致で拒絶されたサリハールは、ストイナ王家の「王統譜」の提出を要求した。おそらく、大陸で最も古い血統を受け継ぐだろう王家は、それこそ、神話の時代にまで遡る、偉大なる神々の血筋だともいわれている。ストイナ王国が事実上過去の産物となっても、駐留するマルニアーム王国軍を追い出して、新たに王として君臨しようとする者が現れないのは、その血統を支持し信奉することが、ストイナの矜持に他ならなかったからだ。

そして、「王統譜」は彼らの矜持を具現化した物に等しかった。

王家の誕生以来、一度として絶えることなく脈々と受け継がれてきた血統であり、系譜である。他国には決して存在しない、それは彼

らの「歴史」であり、彼らがこの地に君臨していたことの「証明」であった。いささか大袈裟にすぎるかもしれないが、文化と文明を育んできた者たちにとっては、精神の内側までも蹂躪しゅうりゅうされたようにも感じただろうか。

そして、肝心の「王統譜」であるが、その所在を明かす義務の必要を認めなかったのだろう。「王統譜」は城と共に王妃が持つていった、とストイナから回答がなされた。だから、渡すことは叶わない、というのだが、それが虚偽であることは明白である。

しかし、ストイナの強弁に対して、反論する手段をサリハールは見付けられなかった。頑ななまでに主張を繰り返されては、黙るよりなかったのだろう。そして、そのまま興味を失ってしまった。それを手に入れた者がストイナの王だ、とされたのはもうずいぶんと昔の話である。

「……それだけではありません」

シスタリアの話は続いていた。怒りのためか、わずかに声を震わせて彼女はカリファスに語りかけてくる。その一語一語を聞きながら、カリファスは思わずにはいられなかった。だからどうしようというのだろうか、どうしろというのだろうか、と。そうした、カリファスの思いに気が付いているのかいないのか、シスタリアは同席する二人の人物に視線を移した。長椅子の背後で沈黙を守る両者に何かを確認するようにならずくと、シスタリアは再び言葉を続けた。「あなたとラリアンヌの婚約は、先王がお決めになったこと。それが、ストイナの民たちを、どれだけ安堵させていたことではない。生前のエドワルは、カリファスのことを「人質」と呼んだことはない。腹の内でもう思っていたのか、それをカリファスに知る術はないが、少なくとも、表面的には対等に扱ってくれた。マルニアーム王国の礼儀に適った方針であることはやむを得ないことだとしても、勉強に剣術と将来仇として牙を剥くかもしれない相手に対して、

一通りの教養をあたえてくれた。

そして、自身の娘を差し出して、后にさせると言ったのだ。ただ単純に、古い血統に自身の血筋を混ぜたかっただけであったのかも知れない。だが、ラリアンヌはマルニーム王国の息女であり、これを后とすることは、マルニーム王家にストイナ王家が乗っ取られるような観がある。それでも、少なくとも、ストイナが誇りとし矜持とする偉大なる血統を残すことはできる。

たったそれだけに救いを求める者たちの、哀れを背負うのはカリファスであつたかもしれない。

しかし、ラリアンヌとの婚約は、サリハールによって一方的に解消されてしまった。その後、ラリアンヌがフェルタ王国の王子と婚約した、と聞かされては、ストイナが浮足立つのは当然と言えるだろう。

「彼らは、また再び侵攻されるのではないか、と競々（きょうきょう）と（う）としているのです」

そう言つて、シスタリアは口を噤んだ。暖炉で爆ぜる炎と、窓を叩く風の音が、静まり返つた室内に不協和音を奏でる。暖炉の中で積み重ねていた薪が、一際大きな音を立てて崩れた。カリファスはシスタリアの視線から逃れるようにして、その方向へ顔を逸らす。長椅子の背後に佇む二人の内、アリマールがゆっくりとした口調でシスタリアに問いかけるのを、カリファスは燃え盛る炎を見つめて聞いていた。幼き日に見た炎上する城の姿を、脳裏の片隅に思い出しながら。

「……それで、どうして、カリファスどのを……？」

「アリマール殿下、今のストイナに必要なのは、王の声に他ならぬ、と王太后陛下は判断なされたのです」

そう答えたのは、もう一人の同席者で、ここマルニーム王国で宰相の地位にあるルーレントであつた。すでに老年の域に達しているルーレントは、白くなつた長い髪を背中束ね、広い額には年輪を刻む皺が見える以外には年齢を感じさせない。長身の背筋をまっ

すぐ伸ばし、恰幅もよく威厳さえ漂う佇まいは近寄りがたくもあつたし、未だ衰えることのない翠の眼光は近付く者を容赦なく射抜く鋭さがあった。そのルーレントをして、御しがたいのがサリハールのようである。だが、それはサリハールの方でも同様に感じているのかも知れない。

多くの者を従え、叱咤するルーレントの低い声音が続いた。

「ストイナをなだめることができるのは、今となっては、カリファス殿下だけであろう、と」

頭上から降ってくる言葉を、カリファスはうつむいて聞き流した。もし、歴史が許していたなら、自分が忠誠を誓ったのはシスタリアに他ならない、後日のことになるが、カリファスを訪ねてルーレントはそう回顧する。あの方は、自分にとって生涯唯一の主君であつたのだ、とシスタリアが女王として即位することのなかつた可能性を惜しんだ。

その、歴史の可能性に埋もれてしまった女王は、穏やかな口調でカリファスに理解できなかつた、最初の言葉を繰り返した。

「あなたを、ストイナの地に帰してあげることにはできませんが、ここデイエンテで、あなたをストイナの王として即位させましょう」
手駒でしかないカリファスの、もつとも有効的な利用方法を思い付いただけなのではないか、そして、それが自身の役割なのだろうか、カリファスは己という存在をこれほどまでに呪わしく思ったことはなかつた。

そうしたカリファスの思いなど、考慮するでもなく歴史の可能性に埋もれた女王は続けた。

「そして、王としてストイナの地に語りかけてほしいのです」
「……」

「マルニアーム王国は、ストイナに対して敵意はないのだ、と」

それでも、サリハールが向けるストイナに対する執着が変わらなければ、態勢に影響するとはカリファスには思えなかつた。あるいは、何か他に算段でもあるのだろうか。

しかし、シスタリアは年が改まった西海暦三六一年一月七日、波
乱に満ちた生涯に終止符を打つ。もちろん、カリファスを王として
截^たたせることは叶わなかった。新たな可能性の誕生を見ることがもな
く、歴史は刻まれていく。

独白

歴史は記憶する。

西海暦三六一年一月七日 マルニアーム王国王太后シスタリア
ア薨去

まるでそれが必然でもあるかのように、刻まれていく。死者の無念も生者の悲哀も、そこに入り込む余地などないかのように。

陰となり日向となり、時には、慈しみながらカリファスを見守ってくれたシスタリアが、黄泉の住人となつて旅立ったのは、西海暦三六一年一月七日の早暁のことだった。あるいは、夢物語のように、カリファスをストイナの王にするのだ、と語っていたシスタリアがもうこの世界のどこにもいない。

「……これで、わたしは、最後の盾までも失ってしまった」

朝、着替えをすませたばかりのカリファスは、王宮に務める女官のひとりからシスタリアの死を聞かされてそう独語した。昨年 of 末ごろから体調を崩して寝付いていたが、まさかこれほど早くに亡くなるなど、誰に予測できただろうか。シスタリア自身、風邪を引いただけだろう、と言っていた。

思えば、エドワルの死にも不審な点はあった。そして、今度のシスタリアである。宮廷に陰謀は付き物であるのかもしれないが、これが陰謀であるとして、誰が何を目的として企てたのだろうか。一番に利益を得る者が首謀者だ、ともいうが、シスタリアが亡くなつて誰が一番得をするのか。思考を巡らせて、カリファスは溜息を吐いた。首謀者を割り出したところで、彼には何の権限もないのだ。

何よりも、まずカリファスが考えなければならぬのは、故国ス

トイナの今後であるだろう。シスタリアという枷のなくなったサリハールは、誰はばかることなく自身の意思を貫いていくのではないだろうか。

シスタリアの葬送の儀も無事に終わると、サリハールのストイナに対する敵意は明確なものとなった。彼の地を「不穩の巢窟」と吹聴しては、「平定するすべきだ」と公言して回る。ストイナの地を完全に併合することは、父王エドワルにもできなかったことである。だが、それはもしかしたら、できなかったのではなく、しなかつたのではないか、とも思われるが、いずれであれ、ストイナの地に自治権が存在することは事実である。

父王の成し得なかったことを自らが成し遂げることで、サリハールは自らの権威と威光を示そうとでもしているかのようだった。そのサリハールの描く脚本の中で、カリファスにあたえられた役回りとは何であるのだろうか。

「わたしを、殺すだろうか？」

窓際にひとり佇んで、カリファスは独語した。露台の向こう側で、冷たい風に小枝を揺すられる冬枯れの木立が見える。今は枝をにぎわす葉を失って、生命の尽きたかのように思える木立も、春には新芽を吹いて生命の賛歌を唄う。決して、枯れ果ててしまったわけではないのだ、とばかりに夏には緑にあふれる。そして、秋になれば色付いた葉が足音立てて近付いてくる、冬を予感させる冷たい風に舞う。まるで、一葉舞う度にひとつの生命を失うかのように。それでも、巡ってくる春に、何度でも生命を甦らせる。その、何と力強いことだろうか。

「それに比べて、わたしは……？」

一度失えば、二度とは還ってこれない果敢無い存在でしかない。だからこそ、カリファスは生かされてきた。寒空の下、吹き付ける風を受け止めて勢いを弱める木立のように、ストイナの地で湧き上

がる怨嗟の声をカリファスは受け止めているのだ。カリファスがい
るからこそ、ストイナもマルニアームに対して反旗を掲げることが
できないでいる。それをすれば、カリファスの身が危うくなること
を理解しているからだ。

しかし、逆にいえば、カリファスの生命が絶たれるようなことに
でもなれば、ストイナは堰せきを切られて貯水池からあふれ出る激流と
なってマルニアームに攻め入るのだろう。そうなることを防ぐため
に、彼は生かされている。エドワルがストイナそのものを恐れてい
た証左であるのだとしても、カリファスの生命はそうした危うい均
衡の上にあるのだった。

「……何も、わたしを殺して、ストイナを逆上させるような真似は
しないでろう」

切り札は最後まで秘匿しておく方が、都合のいい場合もある。む
しろ、カリファスの存在を前面に押し出して、ストイナを牽制しな
がらも、一方でそれを撃つ方が易いのではないだろうか。

「だとすれば……わたしは、ストイナかれらの枷かせでしかない」

それが悔しくもあり苛立たしくもあるというのに、カリファスに
は自らの生命を自らの手で絶ち切ることもできなかった。その死因
が何であろうとカリファスを亡くせば、ストイナは自らの手で堰を
切ることだろう。戦いくさなどという愚かしい行為で、もう誰にも死んで
ほしくなどなかった。父にしてストイナ最後の王となったエングレ
ンは、生きるためではなく生かすために国を開けたのだ。その遺志
を継いだ王の子であるカリファスには、彼らを生かす義務があるに
違いない。

しかし、ストイナから遠く離れた異国の地から、彼の想いと彼の
声を、いかにして伝えればよいのだろうか。その手段をあた
えてくれると言ったシスタリアが、今は恨めしくさえあった。

木立の隙間を吹き抜けた風が窓を叩く音にカリファスは、いつか

の冬ふゆの一日いちにちにラリアンヌが残こっていた詩集ししゅうに綴つづられた言葉を思おもい出す。

風に心こころがあつたなら。だが、窓まどを開ひらけ放はなつて風かぜを迎むかえ入れても、ストイナの民たみの声こゑはカリファスの耳みみに届とくことはない。それでも、風かぜは渡わたつていく。天あまの高たかみをどこまでも吹ふき抜ぬけていくのだから風かぜに、想おもいを馳はせて見み上げたカリファスの空そらに太陽たいやうの姿すがたはなかつた。

「太陽たいやうの塔たか」もしくは「虜ろ囚しゆの塔たか」、高たかく天あまに向むかつて伸のびるその塔たかに阻さまれた太陽たいやうの輝かがやきは、カリファスを照あらし出すことを拒こんでさえいるかのようだった。

「わたしは、何故なにが、生きる？」

エドワルの存命ぞんめい中ちゆう、カリファスはただ生きていればよいだけの存在ぞんざいだった。エドワルの没後ぼつごも、それで構かまわないのだ、とシスタリアは言いつてくれた。それが、両者りやうしやを失うつた今いま、カリファスは生きることも死しぬことも許ゆるされぬような気がしてならなかつた。今はただ、耐たえ忍しのぶより他に道みちはないのだろうか。冬晴ふゆはられの空そらの下した、風かぜに揺ゆれる木立きだてのように一度は絶たれたかに思おもえた生命せいめいが、新たな春はるに芽吹めぶきを迎むかえるように、その先まへにカリファスも何かを見付みけることができるのだろうか。

「何も、なかつたら……？」

苦渋くじゆの表情へいしやうを浮うかべて、それでも、カリファスは何なにかを信しんじてみたくて首くびを横よこに振ふる。一度得とれた生なまには必ず意い味みがあり、価値かちがあるはずだ。いつか、それらを知しることができるとなら、その時まで生なまき続けていたい、と願ねがうことは我がままではないだろう。

露台ろだいに歩あを進すすめたカリファスは、吹ふき付けてくる風かぜを全身ぜんしんで受け止とめた。

西海曆せいかいりき三六一年さんりくごちゆういちねんの一月いちげつも終わおわるころ、カリファスは彼自身かみづかみの小こさな部く屋やを出でて、その住すまいをそれまで彼かを見下みくだろしていた塔たかに移うつした。サリハールの意向いこうであることは明白めいはくで、カリファスはそれに唯ただ

々として従った。

狭隘な盆地にある王都ディエンテの空は狭いというが、露台のない塔の部屋から見上げるカリファスの空は、それよりも狭かった。

来訪者

花が咲いたよ アシエリアの花が咲いたよ
恋せよ乙女 アシエリアの薄紅に頬染めて

空は澄み 太陽は微笑み

春が来たよと アシエリアの花が薫るよ

マルニアーム王国王都ディエンテの春は、アシエリアの花で始まってアシエリアの花で終わるのだ、とされている。厳しい冬を越えて、アシエリアは枝一杯に無数の花を咲かせる。重なり合った薄紅は虚空を覆い、甘く香る花の匂いに大気は染まる。絢爛にして華麗に咲き誇った花を、人々はいつまでもあきることなく愛でながら春を満喫する。やがて、散り行く定めの花の短命を惜しみながら。

そして、西海暦三六一年の春の訪れを告げたのも、アシエリアの花であった。例年であれば、王宮では「春の庭」で賑やかな園遊会が催され、市井においては花の下で歌舞音曲を楽しむ。だが、今年はシスタリアの喪中であることから園遊会は中止され、民も仰々しく花を愛でることを控えた。それでも、花の見事な美しさが変わってしまっただけではなく、今年もアシエリアは訪れた春に咲き誇った。王都を囲む山の連なりの薄紅に染まった様は、山それ自体が燃えているかのような錯覚を起こさせる。その光景に、アリマールが初めて心奪われたのは、まだずいぶん幼かった日のことだ。探険と称してカリファスを無理矢理引き連れて、高く天に向けて伸びる塔の階段を息切らせて昇った。その最上階の部屋から臨む眺望は、どれほど時が流れても変わることはないようである。

中天をすぎた太陽が、軽い眠気さえ誘うような春の柔らかい陽射しを注いでくれることも、天空を渡る風に運ばれて、どこまでも流れていく雲の白さも、あの日と同じである。彼の傍にいる人も一緒であるというのに、あの日とは明らかに異なることがあった。それは、この場所が今は、カリファスの部屋である、ということだった。「……もうすぐ、アシエリアの花も散ってしまおう」

そう言つて、アリマールは室内を振り返つてカリファスに視線を向けた。「太陽の塔」にカリファスが住まいを移して二カ月、今ではその名をすっかりと「虜囚の塔」に変えてしまつていた。カリファスが部屋の外に出るのにも、カリファスを部屋に訪ねるのにも、サリハールの許可が必要とされた。だが、それは結局のところ建前でしかなく、身の回りの世話をするための女官以外が部屋を出入りすることをサリハールは認めなかった。

カリファスが自由を奪われるのと並行して、再び自由を得たラリアン又は、サリハールに対して何度もカリファスとの面会を懇願したが、その切なる願いは一度として叶つてはいない。そうした状況にあつて、アリマールがいかにしてカリファスの元を訪ねるのか、カリファスが軟禁されてから、初めて顔を見せたアリマールは、悪戯いたづらに成功した幼児おんなこのような得意げな顔をして言ったものである。

「開かぬ扉も、呪文を唱えると開くようになっていく」

もちろん、呪文の言葉は「サリハール」である。ただし、あくまでも、アリマールが王弟であるからこそ通用する呪文であつて、ラリアン又はが唱えてみても扉が開くことはないだろう。それはアリマールだけでなく、ラリアン又はも承知していた。

その当初は、足を踏み入れた部屋のあまりの光景に、アリマールは言葉を失つたものである。子供のころに一度だけ侵入して以来ではあつたが、ここは、これほどまでに冷たい空間だつただらうか、といぶかしまねばならなかった。

居間と寝室とを兼ねたお世辞にも広いとは言えない部屋は、床も天井も、そして、壁までも石に囲まれており、窓にカーテンもなかった。いくら暖炉があるとはいえ、熱はすべて石の壁に奪われていくようだった。以前の部屋でさえ殺風景で寒々しくあったのが、ここではそれを具現化したようでさえあった。窓は南北の二か所、その北側の窓の下に寝台と箆笥があり、部屋の中央に円卓と椅子が二脚あるだけだった。そして、北側の窓からはかつてカリファスが寝起きしていた部屋を見下ろすことができるというのは、皮肉としか呼びようがない。

自身の置かれた境遇を、どう思っているのだろうか。沈黙を守るカリファスに、アリマールは語りかけながら、その胸中を図ろうとして断念した。それが、傲慢であるように思えたのだ。

「残念ながら、花の季節も、もうすぐ終わってしまう」

アシエリアの花が散った後に若葉が芽吹くと春は終わった、と誰もが口をそろえる。だが、アリマールはそうは思わない。春を彩る花は、決して、アシエリアだけではない。そうは言っても、散り行く花に馳せる名残惜しさは尽きぬもので、それを女々しいと思いながらもアリマールは小さく溜息をもらした。そして、カリファスに向けて微笑してみせたのは、言えないでいる胸の内をごまかすためであつたらうか。

特別、隠し立てするつもりはないが、カリファスに話したところで、どうなるというのだろうか。言い訳をして、自身の無力さから逃れたいだけなのではないだろうか。その一方で、カリファスには知る権利があるのではないか、と逡巡する。今日こそは打ち明けよう、と通いつめて五日になる。

そうした、アリマールの心の揺らぎに気が付いたのだろうか、カリファスがアリマールの視線から逃れるように顔を逸らした。だが、それは杞憂でしかなかったようで、カリファスはアリマールの独り言に答えた。

「わたしは、あの花が好きではありません。アシエリアの花の色は、

人血を吸ったかのように見えるのです」

「……」

「余計なことを、申し上げました」

寝台の端に腰をかけたカリファスが、反対側の、南向きの窓辺に立っているアリマールにそう言っただけ軽く頭を下げる。それに対して、アリマールは首を横に振った。

「気にすることはない。あの花の色をどう見るかは、個人の勝手だ」
そうは言いながらも、アリマールの視線は今一度、遠くの山並みを染めるアシエリアの薄紅に向けられた。アシエリアの木の下には死体が埋まっているのだ、カリファスと出会う以前に、乳母からそのような話を聞いたことがある。夜になってもなかなか寝ようとはしないアリマールを、軽く脅すつもりもりの乳母の戯言であったのかもしれないが、夜になっても眠らないでいるとアシエリアの精霊が迎えに来る、と言っていたことが思い出された。

当然、カリファスがそのことを知っているはずがなく、それでも「人血を吸った」色に見えるということは、もしかしたら、本当にアシエリアの下には死体でも埋まっているのかもしれない。そうだとしたら、一体、幾人の亡骸を必要とするのだろうか。

妄信まうしんにすぎない、とアリマールは小さく笑って、窓辺から離れて椅子に座った。円卓の上には何の飾り気もない三つ又の燭台と、アリマールが持参した酒と酒杯がある。たった、これだけを持ち込むに際しても、塔の出入り口で屹立する衛兵の検閲を受けなければならなかった。命令です、と短く述べて有無も言わず調べ始めたのだ。彼らを憎んでも仕方がないことはわかってはいても、忌々しく思えてならなかった。

彼らさえいなければ、ラリアンヌの手紙くらい預かってもらえただろう。それ以前に、父王がカリファスに成人の祝いに贈った、ストイナ王家所縁ゆかりの剣を届けてやれるのだが。

それにしても、とアリマールは酒の瓶を開封しながら考える。カリファスに剣術を指南したのは、父王エドワルであったが、そもそ

も、父はカリファスに何故剣を教えたのだろうか。囚われの身として、およそ一生を終えるしかなかったはずのカリファスにとって、剣術などというものは無用の長物でしかないだろう。まさか、いつかカリファスに討たれるつもりで、剣術を指南していたのだろうか。模擬試合で何度か討ち合ったことのあるアリマールは、カリファスの剣の腕がどれほどのものか知っている。決して、アリマールも弱くはないが、カリファスには一度として勝ちを得ることができなかった。それを見てきた兄サリハールは、どう思ったのだろうか。

「身の不運を嘆いて、世を果敢なむに道具は必要ではない。塔から身を投げればすむ」

そう言つて、冷笑していた兄の本音が別にあるのなら、カリファスを自身が恐れていることを認めないための言い訳であったのだろうか。

「……兄上は、酔っておられるのだ」

手にした酒杯の中で、酒はそれこそ鮮血にも似た深い赤色をして揺れていた。カリファスに最初の一杯を注いでから、自身は幾杯の酒を傾けたのかアリマールにもわからなかった。瓶の中はすでに空になっており、ほとんど全部をアリマール自身が飲んでしまったことに間違いないだろう。それだというのに、少しも酔った気がしない。無感動に見つめ返すカリファスの視線を正面に感じながら、アリマールは言葉を続けた。すでに陽は山の稜線に、沈もうとしているようだった。

「兄上は、まだ見ぬ血に、流れる前から酔っておられるのだ」

「王弟殿下……？」

「戦いくさがしたいのだ、兄上は」

その言葉に、カリファスが驚くのがアリマールにはわかった。わずかに口が動いて、何か言いたげにわなないたが、結局、カリファスは一言も口にもすることなく沈黙してしまった。ただ、恐ろしいま

での真摯さでアリマールを直視してくる視線から、逃れるように酒杯を見つめて続けた。

「カリファスどの、兄上は、父上が成し得なかったことを成し得ることで、父上を見返そうとしているのだ」

「サリハール陛下は、たったそれだけのために、多くの者たちに流血を強いるような真似をなさろうというのですか？」

カリファスにしては、珍しく語気が荒かった。もっともだ、とアリマールは思う。死者に何を示したところで、死者は何の誉れもあたえてはくれないだろう。必要なのは、生者に何を示せるかであり、生者から何の誉れを得るのか、ということだ。

「どうやら、わたしは卑怯者のようだ、カリファスどのに、誤解をあたえてしまった」

自嘲して小さく笑うと、アリマールは赤く揺れる液体から、カリファスへと視線を戻した。そして、憤りに声を震わせて言った。ただし、それが何に対する憤りであるのか、アリマール自身にもわからなかったが。

「兄上は、わたしに言いたいのだ。自分が父上の跡を継いだのは間違いではなかった、と。父上を超えることで、それを証明しようというのだ」

「それは……？」

「カリファスどの、わたしは、戦を本当の意味で知らない」

「……」

「だが、わたしは、戦などというものが嫌いだ。知っているように、父はこの国の人間ではなかった。このマルニームがフェルタに戦で敗れて、その結果、父はこの国の王となった」

沈黙するカリファスに向けて、アリマールは淡々と語を紡いでいく。かつて、彼の母がそうしていたように。

「もし、戦などなければ、父と母の運命は出会うことはなかったかもしれない。そうすれば、わたしは生まれてはこなかったことになる」

人と人との出会いが、数奇な偶然からのものであることの証だろうか。それとも、すべては必然であるのだろうか。アリマールの言葉は続いていく。

「わたしは、わたしとして生まれてくるのに、どれほど多くの人の死を必要としたのだろうか。わたしは、一体、その死に似合うだけのことをしているのだろうか？」

人の生には意味があり価値があるのだとして、それを見付けることができた者は、幸せであるのだろうか、それとも、不幸せであるのだろうか。アリマールはカリファスに問いかけて、そして、すぎた日の夜のことを語り始めた。酒の力を借りなければ、話すこともできない自身を滑稽に思いながら。

塔の外ではアシエリアの薄紅が、訪れた春を謳歌するように咲き乱れていた。薄闇に染まる空の下で、こわく蠢惑にして妖艶に春の到来を告げている。どこか遠くおさなこの空で、わらべうた幼児が唄う童謡の聲が木霊していた。

花冷え

切れた糸なら、結べばつながる。もつれた糸なら、解けばいい。^{ほど}だが、通じない心は、どうすれば通じ合うことができるのだろうか。時間をかければもつれた糸でも解けるように、人の心もそうした糸のように単純であればよいのに、そうはいかない複雑さがそこにはある。

窓外に広がるアシエリアの大樹には、咲き始めたばかりの花が、冬の名残を含んだ春先の冷たい風に揺れていた。視線を転ずれば、西の稜線には沈みかけた陽光が、反対側の山並みを赤く染めている。空の青も色を深めて、夕暮れの一時ひとときを感慨深く演出していた。そんな景色を見つめて溜息をもらすと、兄は弟を振り返った。その表情から、兄の溜息が黄昏の美しさによるものではなく、弟の言葉によるものであることを、アリマールはまず理解しなければならなかった。

視線だけ振り返ったサリハールは、相変わることはない背中が曲がった姿勢をしていた。その茶の瞳にかつては宿していた憎悪に嫌悪といったものは消え失せ、代わりに、他者を蔑むような嘲りが見えた。その表情のままの口調で、改めて発せられた声音には肉親に対する情愛など欠片も感じられない。いつから、兄を他人のように感じるようになったのだろうか、どこか見当違いのことを考えながらアリマールは兄の言葉を聞いた。

「おまえは、素直で優しい。だが、それは同時におまえが持つ弱さだ」

場所は、サリハールの私室の居間、王として君臨し、シスタリアが亡くなってからは、誰も正面切って意見する者がなくなって彼は居室を移した。それまでも、決して、質素とは言い難かったが、今

度の部屋の行き過ぎた華美は却って息が詰まるような圧迫感があった。

よく磨かれた大理石の壁面の、要所を飾る黄金と白銀の輝きは欲望の現れのように見えたし、床を覆う敷物の金糸に銀糸を惜しみなく使ったそれは、示威の主張というよりも子供染みた見栄のように思えただろうか。鏡ではなかるうかと見紛うばかりの漆塗りの卓台の上には、白磁の茶器が白い影を描いていた。

アリマールは、兄の嘲笑から目を逸らして、目の前に置かれたその碗に視線を落とした。彼が座る長椅子も、卓台を挟んだ向こう側にある肱掛け椅子も、金糸と銀糸を贅沢に使った細密な紋様が刺繍されていた。

身分と立場から、アリマールもこうした粹の極みのような品物は多く目にしてきたが、さすがに、そこに座るよう促された時には軽い戸惑いを覚えた。必要以上の華美に、吐き気にも似た嫌悪を感じたのだ。それでも、壁にかけられた緑の森を描いた絵画だけは、優しい温もりをあたえたくれた。

中身は手が付けられないまま、すっかり冷めてしまった碗から視線を上げたアリマールの視界に、宵の闇を背負って立つサリハールの姿が映る。視線が向けられることを待ってでもいたかのように、サリハールが言った。

「しかし、余は違う」

王として即位した時から、サリハールは一人称を「余」と改めた。何も弟にまで形式張ることもないだろうに、そうすることで、自身が王であることを確認せずにはおれないようだった。

「余は、父上とは違う。それが、おまえには気に入らぬだろうか？」
「わたしは、ただ兄上に考え直してほしいだけです」

常のアリマールが有する、穏和な雰囲気など微塵も感じさせない厳しい口調だった。それに反して、答えるサリハールの方が穏やか

な口調をしていた。絶対的な立場から、弱者を見下すかのような印象をあたえる口調ではあったが。

「結局、そこに行き着くのだな。カリファスを自由にして、ストイナに対して寛容であれとおまえは言うが、その必要がどこにあるのだ？」

挑むような眼差しが、アリマールに向けられる。何故、勝者が敗者に媚びる必要があるのか、それがサリハールの主張だった。そして同時に、ストイナの地を平定して改めてマルニアームの威光を示す、それが新王の方針だった。

しかし、あの戦の終末さいくわいにおいて、エングレンが王都ベルムアを火の海とすることも厭わず、抗戦を続けていれば勝者の立場は逆転していたかもしれない、いつだったか、独り言のように語っていた亡き父王の姿がアリマールの脳裏に浮かんで消えていった。その父はカリファスとラリアンヌを結婚させることで、穩便に事態を推移させようとしていた。

「兄上……」

呼びかけて、アリマールは大きく息を吸って吐き出した。苛立ちを隠そうともしないサリハールの、侮蔑さえ浮かんだ表情を見据えて続ける。

「……兄上、やはり、王位はわたしが継承すればよかった、といまさらのように悔まれてなりません」

「何のことだ、アリマール？」

冷やかにアリマールを見返して、口元に冷笑を浮かべた物言いは、季節を逆行させて霜を含んで冷淡に響いた。アリマールは一瞬だけ怯んだが、膝の上で両の拳を握りしめて自らを律すると兄の言葉に對抗する。

「父上が亡くなられる少し前です。わたしを枕元にお呼びになると、おおせになられたことがあります」

「……」

「王位を継承するのは、兄上ではなく、わたしだ、と」

しかし、アリマールはそれに首を横に振った。それを承知できる兄ではなく、内戦へと発展する恐れさえある。国を損なうだけで何も得することはなく、フェルタの伯父を喜ばせるだけだろう。諫言、というにはいささか大仰であったろうが、エドワルはアリマールの言葉を首肯した結果、サリハールを次期国王に定めた。それから、幾日かしてエドワルは還らぬ人となった。

「そつだ……」

歪めた顔に愉悦を湛えてサリハールが言って、そして、続けた。

「……わかるか、アリマール？ だからこそ、父上は死ななければならなかったのだ」

「兄上？」

何を言おうとしているのか、アリマールはにわかに理解できなかった。あるいは、理解することを思考が拒絶していた。サリハールの口から吐き出される言葉は、空気さえも凍て着かせて、アリマールは背筋に悪寒が走るのを感じた。

「そつだ、父上を死なせたのは、余だ」

「……！」

「もつとも、実際に毒を用意し、飲ませたのは宮廷医のひとりだが、名を知りたいか？」

そんなことよりも、アリマールには他に知りたいことがあった。何故、父を殺さなければならなかったのか。だが、それはあえて聞く必要もなく、理由は明確だった。エドワルが次代の王に望んだのが、サリハールではなくアリマールだったから、自身が玉座に着くためには父とはいえエドワルが邪魔だったのだ。それにしても、サリハールはエドワルの意向を、いつ知ったのだろうか。

離せなくなったアリマールの視線の先で、サリハールが愉悦の表情を崩すことなく言葉を紡いだ。

「しかし、現在、王位にあるのはおまえではない。おまえがいまさら何をわめこうが、もはや妄言でしかない。残念だが、この国の王は、余だ」

アリマールは、身を震わせた。アシエリアが咲き始めるころ、一時的に風が冷たくなることがある。まるで、開花する蕾を押し留めようとするかのように、もしくは、少しでも長く春が続いて行けるように、ただひたすらにアシエリアの花が開くのを遅らせようとする。

しかし、決して、そうした季節的な寒さからアリマールは震えたわけではない。目の前にあって、泰然と佇むひとりの男から受ける強烈な恐怖に、身がすくむのだった。

「……何故、母上までも？」

窓外に広がる、訪れたばかりの闇を背負う男に向けて、アリマールはそれだけをつぶやいた。声音がわずかに上擦って、震えた。兄と向き合い、対峙することを避けてきた報いではないだろう。父と母を殺めた事実を喜々として語る、その声音と口調、そして、吐き出される言葉、それが血を分けた兄のものであることが信じられなかった。

いつそのこと、泣きわめいてしまうことができれば、どれだけ楽であったらうか。それができない、というのなら、せめて毅然とした態度を維持していきたい。だが、後日になって何度思い返してみても、一体、自身がどのような顔をしていたのか思い出せなかった。そして、その回想の中に現れる兄の顔には、いかなる感情も宿ってはいなかった。

だから、この時、兄がどのような顔をして言ったのか、アリマールにはわからなかった。

「カリファスを、あの、生きていれればいいだけの存在を、ストイナの王にするのだ、とこの余を前にしてあの女は言ったのだぞ」

あの女、それが、シスタリアのことだとアリマールが理解する前に、サリハールは言葉を続けていた。

「愚かな夢想に憑かれなければ、今少しは長生きできたであろうに。

余を虚仮にしようとする忌々しい女に、相応しい報いをくれてやつたまでのことだ」

これが、この人の本性なのだろうか。同じ時間を、同じ場所ですごしながらも、思うところは同じ位置には存在しない。いつから、兄は兄でなくなってしまうのだろうか。そんなことをぼんやりと考えながら、アリマールは淀みなく滔々と流れるサリハールの言葉を聞いていた。

「天に二日はないように、王も二人とはいらぬ」
「……」

「余は決めたのだ、ストイナの王となるに王統譜に頼るのではなく、実力をもってする、とな。玉座とは所詮、血で購うものだ」

そして、サリハールは笑った。侮蔑と軽蔑、それにわずかばかりの憐憫を込めて、サリハールは高く低く笑った。自らの可能性と未来を確信するかのようであり、唯一無二の絶対者でもあるかのようだった。

自らの選択は間違っていたのだ。病床のエドワルの前では存在していた確信は、サリハールの前にもろくも打ち砕かれた。犠牲となつた多くの死者のためにも、今もまだ耐え忍び続ける生者のためにも、アリマールは玉座を巡って兄と対峙しなければならなかったのだ。

現在の争いさえ回避する力もなく、将来の争いを恐れるなど、本末転倒と言わざるを得ない。結局、自身の臆病がカリファスひとり救ってはやれなかった。

「……アリマール」
部屋を後にする弟を呼び止めると、兄は続けた。

「おまえが脚光を浴びたければ、余を殺すことだ」
しかし、この時のアリマールには、それが可能であるなどと思ってもみなかった。ただ、窓を叩く風の音が、何かを予知して一際大

きく響いていた。

薄ら寒い夜が、何事もなかったかのように、すべてを包み込んで
更けようとしていた。

模索

光と影、昼と夜、世界が陰陽二つから成るのだとすれば、自らの存在はいずれに属するのだろうか。

脚光を浴びたければ自分を殺せ、そのサリハールの言葉が、アリの脳の裏から離れなかった。兄はどのような表情をして口にしたのだろうか、自分はどのような表情をして聞いたのだろうか。そして、それをカリファスに語るアリマールはといえば、サリハールと両親を同じくする実の兄弟だった。

その事実が、アリマールを際限なく恐怖に陥れる。さらに言えば、もしかしたら、カリファスはサリハールの死を望んでいるのかもしれないのだ。少なくとも、サリハールがいなくなれば、ストイナに対するマルニームの敵意は消失するに違いなのだから。

そんなことを考える己自身が、最も恐ろしい、とアリマールは身を震わせた。

アリマールの前には、空になった酒の瓶と酒杯があった。その視線の先には別の酒杯があつて、溜まった赤い液体が訪れ始めた夜の闇の中で、気味が悪いほど鮮明に浮かび上がって見えた。カリファスは寝台の端に腰かけたままで、食い入るような眼差しをアリマールに向けている。物言わぬ青い瞳がアリマールを責めているようにも感じて、知らずの内に彼は視線を落としていた。そして、つぶやくような小声で、言葉を吐き出した。

「カリファスどの、わたしは、どうすればいいのだろうか？」

「どうして、それをわたしに答えることができる、と思われるのですか？」

恐ろしいくらい静かな声音が、閉ざされた空間に周回する。

「わたしには、今の殿下に対して、答えるべき言葉を持ち合わせません」

そのカリファスの言葉に、アリマールは小さくうなずいた。たとえ、アリマールの取るべき道が唯一しか存在しないのだとしても、カリファスがそれを言葉にできるはずがない。一見、穏やかに見える海面にも、その深海では激しく逆巻く潮流があるように、カリファスもまた露わにすることのできない感情を秘めているのだろう。おそらく、アリマールとは比較にならないほどに。

「……結局、失ったものを取り戻すためには、別の何かを失わなければならぬ、ということなのだろうか」

そうであるのだとすれば、世界とは何と不条理にできていることだろうか。アリマールは、両の掌を膝の上で握りしめて考える。失うことで、何かを得られることができるのならば、そこには救いがあるだろう。だが、何も得ることができなければ、失う意味とてない。目の前にいるカリファスは、アリマールよりも多くのものを失ってきているはずだ。それだというのに、カリファスは失うことで何を得てきたというのだろうか。何も、ないではないか。

しかし、何も得られなかったはずのカリファスの次の言葉は、アリマールには重く響いた。

「王弟殿下、何かを失って嘆くことができるのは、その何かを手に入れた者だけです。殿下は、何を失われたといって、嘆かれるのですか？」

「……！」

「あなたは、まだ、何も手に入れてもいないではありませんか」

そうだ、その通りであるのかもしれない。握りしめた拳を見つめて、アリマールは自問自答する。確かに、自分はまだ何も手に入れているわけではない。手にすることを求められて、それをアリマールは自らの意思で振り払った。それが今日の結果を招いたのだとすれば、それを修正するために過去に遡って本来手に入れるべきであったもの

を、この手につかめばいいというのだろうか。

時間を巻き戻すことはできないが、過去を取り戻すことができれば、来る未来を別のものに変更することができるのではないだろうか。少なくとも、そうする努力をするべきなのではないか。過去の過ちを糺す^{ただ}ためにも、そして、未来をより幸福なものにするためにも、戦う勇気を持たなければならぬのだ。

しかし、戦うといって、一体、誰と戦えばいいのだろうか。アリマールは視線を上げて、カリファスを見つめた。視線を受けて動じる様子もなく、ただ沈黙を守ってアリマールの視線を受け止めるカリファスは、戦うべき相手ではないだろう。

「……カリファスどの、わたしは……」

「殿下、どうか結論を急がれませんように」

そう言ったカリファスの言葉は、アリマールの胸中を知っているかのような、その上で、窺^{たしな}めているかのようなだった。それとも、それはアリマールの身勝手な解釈にすぎなかっただろうか。そうであるのなら、カリファスの本心はどこにあるのだろうか。

しかし、それを問い質す勇氣は、アリマールにはなかった。改めて小さくうなずくと、ささやくように言葉を発した。

「少し、考えてみよう。わたしに、何ができるのか……」

誰かがそれを望むからではなく、己がそれを望む結論を導き出してみよう。そうすれば、いかなる結果が訪れようとも、少なくとも誰かに責任を押し付けるような、卑怯者にはならないですむだろう。忍び寄る夜の闇を見つめて、アリマールはそう思っていた。

わずかに込められた同情を注いで、女官が円卓の上に置かれた燭台に、真新しい蝋燭を立てて明かりを点していた。窓外からしみ込んでくる夜の闇を、その小さな灯火^{ともしび}が懸命に遮ろうとしている。どこか温かく優しい揺らめきは、ささくれ立った心を和らげてくれるように、アリマールの顔に自然と微笑が広がっていく。

立ち去り難い名残惜しさを感じたが、戸口に向かう女官を呼び止めて、アリマールは椅子から立ち上がった。明かりを持たずにきたこともあって、アリマールは女官が手にする明かりを頼りに、一緒に塔を出ることにしたのだ。

簡単な別れの挨拶の後、アリマールはカリファスにまたの来訪を約して、女官の待つ戸口に向かった。そして、数歩だけ進んだところでアリマールは足を止めた。来訪の最たる目的を、思い出したのだ。

「そうだ、カリファスどの、いらぬことばかりを口にして、肝心なことを伝え忘れるところだった」

常の彼らしい陽気な口調でアリマールは言って、カリファスを振り返った。背後の窓から外を窺っていたカリファスが、驚いたように視線を向けてくるのを見て、アリマールは一瞬だけ言葉に詰まらねばならなかった。カリファスの背後の窓からは、彼が失くしたすべてを見下ろすことができる。どうしよもないことではあるが、それを見つめてカリファスは何を思うのだろうか。

「……ハドウエルが、この下に移ることを兄上が了承してくれた。近日中にも、越してくるだろう」

それが、今のアリマールにできる精一杯であっただろうか。失ったものの万分の一でも、カリファスの元に戻してやれたのだろうか。カリファスが微笑に笑みを浮かべたように見えたのは、アリマールの気のせいばかりではなかったかもしれない。

先を歩く女官が照らしてくれる明かりに導かれて、アリマールは塔から出ると、闇に浮かぶアシエリアの花を見上げて溜息をもらした。満開をすぎようとするアシエリアの薄紅が、夜目にも鮮やかに浮かび上がって見えた。東の空には太り始めた月が昇り、数多の星を従えて悠然と天の高みから地上を見下ろしている。

その月明かりを受けて、アシエリアはいっそう妖しさを増して夜

風に揺れる。まるで、誘^{いざな}うかのように、手招きさえしているかのように見えなくもない。まさに、樹に宿る精霊の成せる業^{わざ}だろうか。たとえ、精霊ではないとしても、人を惑わせる何か^{何か}が宿っているように感じられた。アシエリアの薄紅を、人血を吸ったかのようにだと評したカリファスの言葉も満更ではないように思えてくる。

見上げるその視線の先で、風にあおられた花弁が、季節外れの風花のように空に乱舞する。視界を薄紅に染めた花吹雪は、アリマールを包み込むように舞い踊る。音もなく降る薄紅の花弁を、胸の高さに持ち上げた掌で受け止めて、アリマールは小さく声を上げた。

何故、それがそんな風に見えたのだろうか。掌に舞い落ちた花弁が、一瞬だけ、鮮血の飛沫に見えたのだ。

「……玉座とは所詮、血で購^かうものだ」

その、サリハールの言葉が、夜の闇を渡る風に乗って聞こえてきた。月の光に照らされるアシエリアの薄紅が、燃え立つような深紅に染まって見えた。

何かが、少しずつ狂い始めようとしていた。あるいは、正しく戻ろうとしているのだろうか。答えられる者は、生者の内に存在しない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036x/>

空白の歴史

2011年12月30日00時51分発行